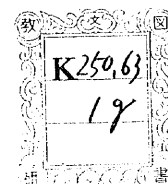
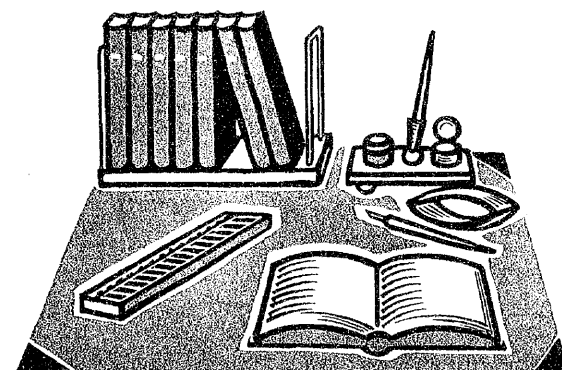


K250.63

1g

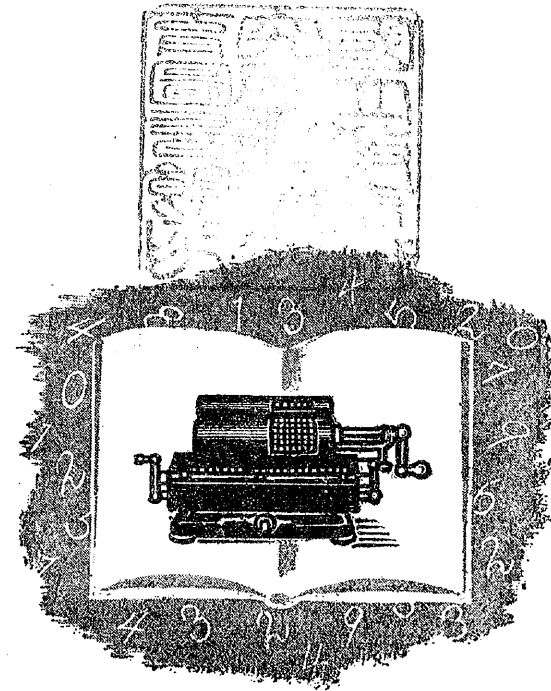
文部省著作教科書

中学簿記



中学校職業科用

中学簿記



目 録

ま え が き	1
1. 記録計算の方法	3
1. どんな方法があるか	3
2. どれがよいか	5
(練習題 1, 2, 3)	6~7
2. 取引の記録計算の方法	8
1. いろいろな取引をどうして計算するか	8
2. どんな方法があるか	10
3. 掛買・掛賣はどう記帳するか	17
(練習題 4, 5, 6)	19~20
4. 勘定記入の間違いを防ぐにはどうするか	21
(練習題 7, 8, 9)	22~23
記帳例題	23
3. 記録計算のまとめ方	26
1. どうして検算するか	26
(練習題 10)	28
2. 営業成績と営業の現状を表わすにはどうするか	29
3. 勘定はどう始末するか	31
(練習題 11)	33
4. 帳 簿	35
1. 帳簿はどうつけるか	35
(練習題 12)	37
2. 補助簿はどうつけるか	43
記帳練習例題(第一例題)	47

5. 勘定科目と勘定記入の法則	50
1. 勘定科目はどう分類されるか、勘定記入の法則はどうなるか	50
(練習題 13)	55
2. 簿記のしくみの特長	55
3. 勘定科目について特に注意すること	57
(練習題 14)	62
6. 取 引	63
1. 取引とはどんなことか	63
2. 取引はどう分類されるか	63
3. 取引の対立関係をまとめてみるとどうなるか	65
(練習題 15)	66
7. 決 算	67
1. 決算はどんな順序で行われるか	67
(練習題 16, 17)	71
記帳練習例題(第二例題)	72
8. 簿記の意義と効用	74
9. その他の特殊事項	75
1. 手形取引の記帳	75
(練習題 18)	79
2. 記帳の能率を上げるにはどうすればよいか	80
(練習題 19, 20, 21)	84
3. 傳票について	85
記帳練習例題(第三例題)	88

まえがき

この教科書は新制中学校上級の生徒に簿記の基礎知識を與え、記帳整理の方法を習得させるために作ったものである。従来、簿記はむずかしい科目であると思われがちであったが、おぼえてみれば決してそれほどむずかしいものではない。適切な方法で学んでゆけば、新制中学校の生徒にとっても、簿記の基本的な、最も大切な点は、ように、しかも充分に会得できるものである。従来、の教科書によく見られたような、意義とか目的とか原理とかを最初にかかげて、それから内容にはいつてゆくという方法は、この教科書ではすて去って、そのかわり、はじめから例題によって実際の記帳を行い、それによって簿記というもののあらましが、身についてわかってから後で、原則とか意義とか効用とかを、はっきりさせる方針をとった。ちょうど、水泳を習うのに、壘の上で手足の動かし方を習ってから水にはいるのではなしに、まず水にはいつて、ともかくも身体が浮くようになってから、はじめて手足の動かし方を習ってゆく方が、習うことの意味がよくわかり、実地に役にたち、そしてまた、興味もわくのと同様である。このような趣旨で編修された本書では、当然の結果として、語句はできるだけ難解なものをさけ、記述はきわめて平易な文章を用い、例題も生徒の生活に直接関係のあるものを選んだ。そのため語句の意義は多少徹底を欠くところもあるろう。しかし、はじめて簿記を習う者にとっては、正確で徹底的なことを欲して、難澁するよりも、平明にして、

要点をつかむことを主眼とすべきであると思われる。実際の授業にあたられる教官各位には、この点を充分了解して、不備を補足し、冗漫を切りつめて、適切に生徒を指導することがのをましい。

なお、「その他の特殊事項」は、特に簿記を選択する生徒のみに学習させるようにして、一般の生徒は「簿記の意義と効用」までに止めてもよい。

1. 記録計算の方法

1. どんな方法があるか

伊藤君は自治会の会計係に選ばれて、現金の収支を整理することになった。

自治会では、みんなが3円ずつ出しあって、組のためにいろいろなものを買うことにした。組の人数は48人で、次のような収支があった。伊藤君のつけた日誌は次のとおりである。

- 4月10日 41人が納めた(123円)。
- 11日 昨日わすれた者のうち、6人が納めた(18円)。
- 13日 60円でボールを買った。
- 16日 32円50銭の花びんと17円の花を買った。
- 20日 休んでいた1人が納めた(3円)。
- 25日 8円30銭で壁新聞用紙1枚を買った。
- 30日 残金を翌月へ繰り越す。

このままでもわかるが、もっと一目ではっきりするような、記録の方法はないだろうか。

それには、どうすればよいか。正しい答が出なければならぬことはいうまでもないが、その計算のすぢ道もはっきりとわかるようにするには、何か良い方法はないだろうか。

伊藤君といっしょに考えてみよう。

まず伊藤君は、算数の方法で次のようにやってみた。

〔甲 法〕

4月10日	41人分入金	¥ 123.00
11日	6人分入金	+ 18.00
		141.00

13 日	ボール代	- 60.00
		81.00
16 日	花びん代	- 32.50
		48.50
"	花 代	- 17.00
		31.50
20 日	1 人分入金	+ 3.00
		34.50
25 日	壁新聞用紙代	- 8.30
	翌月繰越	26.20

次に伊藤君は、お母さんの家計簿を参考にして次のように書いてみた。

〔乙 法〕

昭 和 年	摘 要	収 入	支 出	残 高
4	10 4 1 人 分 入 金	123.00		123.00
	11 6 人 分 入 金	18.00		141.00
	13 ボール代		60.00	81.00
	16 花びん代		32.50	48.50
	" 花 代		17.00	31.50
	20 1 人 分 入 金	3.00		34.50
	25 壁新聞用紙代		8.30	26.20
	30 翌月繰越		26.20	
		144.00	144.00	
5	1 前 月 繰 越	26.20		

さらに伊藤君は、会社に行っている兄さんに聞いて次のように書いてみた。

〔丙 法〕

(収 入)			(支 出)		
昭 和 年	摘 要	金 額	昭 和 年	摘 要	金 額
4	10 4 1 人 分 入 金	123.00	4	13 ボール代	60.00
	11 6 人 分 入 金	18.00		16 花びん代	32.50
	20 1 人 分 入 金	3.00		" 花 代	17.00
				25 壁新聞用紙代	8.30
				30 翌月繰越	26.20
		144.00			144.00
5	1 前月繰越	26.20			

○このほかに計算の方法があるか、考えてみよう。

2. どれがよいか

自治会では、この三つの方法についてどれがよいかを相談してみた。その結果、甲法より乙法や丙法の方が一目ではっきりしていて、すぐれているということに意見が一致した。

△ここで知らなければならないこと

簿記の計算は乙法か丙法によって行う。一般に簿記の計算は＋と－であるから、加える金額を書く欄と、引く金額を書く欄とを別々に設けて、加える金額の合計と引く金額の合計との差を求めて答とする。このような二つの金額欄は乙法のようにならべて書くこともあり、丙法のように左右に分けることもある。なお、乙法のように残高欄をつけるといっそう便利である。

答を書き表すには、合計金額の少ない側に差額を加え、金額欄の両合計を一致させて二本の線を引く習慣となっている。そして残高はふつう、翌月あるいは次期へ引き継がれるので、

摘要欄には翌月繰越あるいは次期繰越と書いておく。

記録をはっきりさせるために、日付を書く欄、説明を書く欄を、金額を書く欄のほかにそれぞれ別に作り、その境を赤い線で区分する。二本線は金額欄の両側に用い、他は一本線とする習慣である。摘要は簡単でしかもわかりやすく書くのがよい。

練習題 1. 次の収支を現金出納帳につけてみよう。

- 4月1日 4月分の学費を受け入れる 100 円。
 5日 4月分の P. T. A. 会費及び校友会費を支拂う 40 円。
 6日 国語・社会・算数の教科書を買う 25 円 40 銭。
 8日 ノート 2冊を買う 12 円 60 銭。
 10日 消しゴム 1個を買う 2 円 50 銭。
 16日 両用紙を 5枚買う 12 円 50 銭。
 20日 伯母^{おば}からいただく 20 円。
 24日 電車賃 8 円。
 28日 郵便貯金に預け入れる 10 円。

現金出納帳の形式は次のようにするのがふつうである。

現金出納帳

昭和 年	摘 要	収 入	支 出	残 高

練習題 2. 次の収支を家計簿につけてみよう。

- 5月1日 前月現金繰越高 4,263 円 50 銭。
 " 副食物 45 円を現金で買い入れる。
 2日 米 10 kg 266 円を買い入れる。
 3日 賣藥 14 円 50 銭、調味料 75 円を買い入れる。
 4日 燃料 131 円 70 銭を買い入れる。副食物 63 円を買い入れる。

- 5日 子供の学校の P. T. A. 会費 40 円を支拂う。雑誌 20 円を買う。
 6日 小麦粉 8 kg 212 円 80 銭、子供の帽子 300 円を買い入れる。
 7日 貸家の家賃 60 円を受け取る。電燈料 32 円 80 銭を支拂う。
 8日 子供の病気のため診察料及び藥代 245 円を支拂う。副食物 23 円 50 銭を買い入れる。
 9日 子供に小づかい 10 円を與える。新聞代 42 円を支拂う。
 10日 くつ下 1足 120 円、副食物 31 円を買い入れる。

家計簿にはふつうの現金出納帳をそのまま用いることもできるが、支出の口数が多いから下のように支出の金額欄を多くし、各科目別にその金額を集計できるようにした方が便利である。

家 計 簿

昭和 年	摘 要	収入	支 出							残高
			食料 費	住居 費	被服 費	光熱 費	衛生 費	修養 費	雑費	

練習題 3. 小づかい帳を作って各自の 1箇月の収支を記入して締め切ってみよう。

2. 取引の記録計算の方法

1. いろいろな取引をどうして計算するか

木原君は学校賣店の会計係となって、次の取引を整理することになった。これから、田と書くかわりに ¥ を用い、また同上の場合には " を、単價のかわりに @ の符号を用いよう。

5月1日 生徒がみんなで ¥3,000.00 の金を出しあい、学校賣店を始めた。

2日 P.T.A. から現金 ¥2,000.00 を借りた。

3日 文房具会社から次のとおり現金で仕入れた。

ノート	100冊	@ ¥8.00	¥800.00
鉛筆	10ダース	" " 60.00	" 600.00
消しゴム	50個	" " 2.00	" 100.00
			¥1,500.00

4日 本日次のとおり現金で販賣した。

			賣價	原價
ノート	20冊	@ ¥8.50	¥170.00	¥160.00
鉛筆	45本	" " 5.50	" 247.50	" 225.00
消しゴム	6個	" " 2.20	" 13.20	" 12.00
			¥430.70	¥397.00

5日 商品に火災保険をつけ、保険料1年分 ¥120.00 を現金で支拂った。

さて、どうすればよいか。まず簿記の方法で記録計算をするとしても、現金ばかりでなしに、商品も借金も資本も、商品販賣益も営業費も、どれもはっきりと計算したい。そうしないと賣店の財産も、営業成績も正確にわからないからである。

木原君といっしょに考えてみよう。

△項目別に記録計算すること

学校賣店や商店などのように、いろいろな取引の起きるところでは、現金の収支ばかりでなく、取引によってどういうものに増加や減少が生じたかを見て、これをいちいち項目別に記録計算すればよい。それには前の乙法か丙法の形式を用いるとよい。この形式を勘定と呼び、丙法を標準式、乙法を残高式といっている。この勘定をのせた帳簿が元帳といわれるものである。

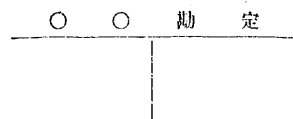
〔標準式〕

(借方)				〇〇勘定				(貸方)			
昭和年	摘要	仕丁	金額	昭和年	摘要	仕丁	金額	昭和年	摘要	仕丁	金額

〔残高式〕

				〇〇勘定							
昭和年	摘要	仕丁	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	残高

標準式の勘定をよく見ると、中央の縦の線で左右二つの同形の部分に分かれていることがわかる。そこでこれを簡単な形にしてみると、次のようにちょう丁の字の形になる。これを丁字形勘定といっている。



残高式は、残高欄をつけてあるため形は左右同形になっていないが、金額欄が二つあって別々に記入するようになっているのは、標準式と同じ考えである。

丁字形勘定は簡単であるから説明するときなどによく用いられる。

勘定の形式でいちばん大切なことは、左と右とははっきり区別されているということである。つまり一つのことを左側に書けば、右側はその反対のことを書くのである。たとえば、増加した場合に左側に書けば、減少した場合には右側に書くというようにである。

簿記では、むかしから、習慣として、左側を借方と呼び、右側を貸方と呼んでいる。つまり左側と右側とでは反対であるということを意味している。そしてこの勘定が各項目ごとに別々に作られていて、各項目ごとに増加減少の計算ができるようになっているところが元帳の特長である。

2. どんな方法があるか

さて、木原君は、取引を勘定に記入しようとして、まずどんな項目に増加や減少があったかを調べてみた。

5月1日 賣店に現金が¥3,000.00 できた。これは現金の増加である。それと同時に、賣店の資本金

というのがこれでできたわけである。このことは現金の増加とは別に、一つの項目として資本金の増加と考えよう。

5月2日 また、現金が増加した。しかし、同時に借金というものができた。このこともわすれてはならないから、借入金という項目を設けておいて、その増加と考えよう。

5月3日 商品を仕入れたのだから商品は増加した。同時に、現金は支拂われたから減少した。

5月4日 商品を販売したのだから商品は減少した。同時に、現金を受け取ったから、現金は増加した。また、利益があったから商品販賣益という項目を設けて、その増加として記録しよう。

5月5日 支拂ったので現金は減少した。火災保険料という営業上の費用がかかったことは、これも一つの項目として記録しよう。営業費という項目の増加とすればよい。

5日分をまとめて表にしてみると次のようになった。

5月1日	現金 増加	←→	資本金 増加
	(¥ 3,000.00)		(¥ 3,000.00)
2日	現金 増加	←→	借入金 増加
	(¥ 2,000.00)		(¥ 2,000.00)
3日	商品 増加	←→	現金 減少
	(¥ 1,500.00)		(¥ 1,500.00)

4日現金増加	←	商品減少
(¥ 430.70)		(¥ 397.00)
		→商品販賣益増加
		(¥ 33.70)

5日営業費増加	←	現金減少
(¥ 120.00)		(¥ 120.00)

すなわち、この場合に項目としては、現金・資本金・借入金・商品・商品販賣益・営業費という項目があり、また、現金と商品とは、増加と減少と両方あり、その他の項目にはこの場合、増加があるだけであることがわかった。こうして各項目ごとに分けておけば、現金のほかにも、商品の増減も、また、資本金や借入金の金額も、はっきり記録計算できるわけである。また、営業費や商品販賣益という項目も、営業に重大な関係のあることであるから、やはり項目別に記録計算しておく必要がある。それが発生した場合は増加したわけであるから、他の項目と同じように勘定につけることができるわけである。

そこで木原君は、現金の増加した方は現金勘定の左側(借方)に書いた。そして現金の増加に相対する資本金の増加、借入金の増加、商品の減少、販賣益の増加は、それぞれ資本金勘定・借入金勘定・商品勘定・販賣益勘定の右側(貸方)に書いた。

また、現金の減少した方は現金勘定の右側(貸方)に書き、現金の減少に相対する商品の増加、営業費の増加は、それぞれ商品勘定・営業費勘定の左側(借方)に書いた。書き入れた各勘定は次のようになった。

現金		商品	
(1) 3,000.00	(3) 1,500.00	(3) 1,500.00	(4) 397.00
(2) 2,000.00	(5) 120.00		
(4) 430.70			
資本金		商品販賣益	
	(1) 3,000.00		(4) 33.70
借入金		営業費	
	(2) 2,000.00	(5) 120.00	

この方法は、つまり一つの取引を、相対する項目に分けて、その両方を考えて記入したわけである。

△ここで知らなければならないこと

ここまでのことをまとめてみると、次のようになる。

- (1) 一つの取引を記入する場合、必ず二つ以上の勘定に記入すること。
- (2) その場合、ある勘定の借方に記入したならば、他の勘定は必ず貸方に記入すること。
- (3) また反対に、ある勘定の貸方に記入したならば、他の勘定は必ず借方に記入すること。
- (4) つまり、一つの取引を記入するのに、借方に記入する勘定と貸方に記入する勘定と、必ず二つ以上の勘定に記入すること。
- (5) その借方に記入する金額と貸方に記入する金額とは等しいこと。
- (6) 一つ一つの勘定についてみれば、借方に増加を記入すれ

ば貸方には減少を記入し、貸方に増加を記入すれば借方には減少を記入すること。

○(6)の例を現金勘定その他について調べてみよう。

このように勘定をつけてみると、勘定と勘定との間には、たがいに連絡があることがわかる。たがいに連絡がないならば、どの勘定もみな一様に、増加は借方へ、減少は貸方へときめて書いてもよいわけであるが、そうではなく一つの取引を記入する勘定は、たがいに連絡があるのであるから、ある勘定では増加を借方へ書き、またある勘定では同じ増加を反対側の貸方へ書くというようなこともおこってくる。

それでは、どの勘定は、増加を借方に書いたらよいか、またどの勘定は、増加を貸方へ書いたらよいかを、これから考えてみよう。

(ア)現金勘定の記入法 まず木原君は、現金が増加した場合、現金勘定の借方に書いたが、これは何かの法則で借方に書かなければならないときまっているわけではない。貸方に書いてもよいわけである。ただそうすると、現金が減少した場合には、(6)によって反対側すなわち借方に書かなければならないことになる。人によって、同じ現金の増加を借方へ書いたり貸方へ書いたりすると、その人はわかるけれども、他人が見る場合にどちらが増加であるか減少であるか、いちいち聞かなければわからないというようなことでは、ひじょうに不便である。そこでどちらでもよいのだが一定しておいた方が便利である。簿記では、習慣として現金の増加は借方へ書き、現金の減少は貸方に

書くというきまりができていたので、木原君もそれにしたがったのである。

○道路はなぜ左側通行としてあるかを考えてみよう。

(イ)商品勘定の記入法 さて現金の増減の記入がきまると、他の勘定の増減は、これに連絡している関係で、借方・貸方のどちらに記入したらよいか、しぜんにきまってくるのである。たとえば、商品を現金で買い入れた場合は、現金が減少して商品が増加したのであるから(3)のように現金勘定は貸方へ記入し、反対に商品勘定は借方に記入することになる。すなわち商品勘定は増加した場合に借方へ記入されるから、次に商品を販売して減少した場合には(6)によって商品勘定の貸方に記入すればよいということも、しぜんにわかってくるのである。

(ロ)資本金勘定の記入法 この場合、現金勘定は増加して借方へ記入したから、(2)によって資本金勘定の方は、反対側の貸方に記入する。すなわち資本金勘定は、増加した場合に貸方へつける勘定であるということになる。もし資本金が減少した場合には、増加の反対側すなわち借方につければよいことも(6)によってわかってくる。

(ハ)借入金勘定はどう記入するか。これは資本金勘定と同様である。やはり現金勘定を借方に記入したから、借入金勘定は反対に貸方につける。したがって、借入金勘定も増加した場合に貸方へつける勘定である。そしてまた、その借入金を返したりして減少する場合には、借方へつける勘定であるということがわかる。

(閉)商品販賣益勘定はどう記入したらよいか。これは現金の増加に相対する項目であるから、(2)によって現金勘定の借方に対して、商品販賣益勘定では貸方に記入することになる。すなわち、利益があった場合は、利益の勘定の貸方に記入することになる。

(閉)営業費勘定はどう記入するか。これは現金の減少に相対する項目であるから、(3)によって現金勘定の貸方に対して、営業費勘定では借方につける。すなわち、費用がかかったときは、費用の勘定の借方につけるといことがわかる。

ここまでのことを丁字形の勘定に記入して示すと次のようになる。

3 日の取引から				5 月 1 日の取引から				4 日の取引から				2 日の取引から				5 日の取引から			
現 金		商 品		資 本 金		商 品 販 賣 益		借 入 金		営 業 費		増 加 勘 定		減 少 勘 定		増 加 勘 定		減 少 勘 定	
増	加	減	少	増	加	減	少	増	加	増	加	増	加	減	少	増	加	減	少

3. 掛買・掛賣はどう記帳するか

学校賣店で次の取引があった。これはどう記帳すればよいだろうか。

5 月 6 日 文房具会社から次のとおり仕入れ、代金は掛とした。

クレヨン 50 個 @ ¥40.00 ¥2,000.00

7 日 学校用として事務室へ次のとおり販賣し、代金は掛とした。

ノート 30 冊 @ ¥8.50 ¥255.00(原価 ¥240.00)

8 日 文房具会社から次のとおり仕入れ、代金のうち ¥1,000.00 は現金で支拂い、残りは掛とした。

インキ 48 びん @ ¥35.00 ¥1,680.00

9 日 山本先生へ次のとおり販賣し、代金のうち ¥100.00 は現金で受け取り、残りは掛とした。

インキ 2 びん @ ¥36.00 ¥72.00(原価 ¥70.00)

ノート 5 冊 " " 8.50 " 42.50(" " 40.00)

30 日 文房具会社へ買掛代金 ¥1,500.00 を現金で支拂った。

31 日 事務室から買掛代金 ¥255.00 を現金で受け取った。

商品を仕入れたり、販賣したりするとき、いつも代金を現金で支拂ったり、受け取ったりするとはかぎらない。あとで受け拂いする約束で、一時、借りたり、貸したりすることもある。こういう場合を掛買、掛賣という。

簿記では、掛買のときその借金を表わす勘定として買掛金勘定を用い、掛賣のときその貸金を表わす勘定として買掛金勘定を、ふつうに用いる。

それでは、買掛金・賣掛金の勘定の記入法はどうすればよいか。

商品勘定の記入法は、すでにわかっているのであるから、これを基準として考えていこう。商品を掛で買うと、商品は増加し、買掛金という借金も増加する。商品勘定は前にわかったとおり、増加した場合だから借方に記入する。そうすると、買掛金勘定は、(2)によって反対側の貸方に記入することになる。すなわち、買掛金勘定は、増加した場合に貸方につける勘定であるということがわかる。

○買掛金勘定は、減少した場合にどちら側につけるか、考えてみよう。

また、商品を掛で賣ると、商品は減少し、賣掛金という貸金が増加する。

商品勘定は減少したから貸方に記入すると、賣掛金勘定は(3)によって反対側の借方に記入することになる。すなわち、賣掛金勘定は増加した場合に借方につける勘定であるということがわかる。

○賣掛金勘定は、減少した場合にどちら側につけるか、考えてみよう。

木原君が上の取引を勘定に記入したところを示すと次のようになる。

商 品		現 金	
(6) 2,000.00	(7) 240.00	(9) 100.00	(8) 1,000.00
(8) 1,680.00	(9) 110.00	(30) 255.00	(30) 1,500.00

商品販賣益		買 掛 金	
(7) 15.00	(30) 1,500.00	(6) 2,000.00	
(9) 4.50		(8) 680.00	

賣 掛 金	
(7) 255.00	(30) 255.00
(9) 14.50	

なお、買掛金勘定・賣掛金勘定の記入のきまりを丁字形勘定で示すと次のようになる。

買 掛 金		賣 掛 金	
減 少	増 加	増 加	減 少

練習題4. 次の取引から、かっこの中に入れてある勘定の増加・減少を考えて、丁字形勘定に増減を書き入れてみよう。

- 市岡商店から商品 ¥5,000.00 を掛で仕入れた(買掛金)。
- 佐藤商店へ原価 ¥2,500.00 の商品を ¥2,000.00 で販賣し、代金は掛とした(賣掛金・商品販賣損)。
- 現金 ¥3,000.00 を銀行へ当座預金とした(当座預金)。
- 手提金庫 ¥2,500.00 を現金で買った(備品)。
- 現金 ¥1,000.00 を木村五郎へ貸した(貸付金)。
- 手数料 ¥50.00 を現金で支拂った(支拂手数料)。
- 手数料 ¥100.00 を現金で受け取った(受取手数料)。
- 借金の利子 ¥200.00 を現金で支拂った(支拂利息)。
- 普通預金に利子 ¥18.00 がついた(受取利息)。

練習題5. 次の取引を勘定に記入してみよう。

- 現金 ¥6,000.00、商品 ¥3,000.00 をもって営業をはじめた。
- 原価 ¥3,000.00 の商品を ¥3,500.00 で販賣し、代金は現金で受

け取った。

3. 近藤三郎から現金 ¥2,000.00 を借り入れた。
4. 商品 ¥4,000.00 を現金で仕入れた。
5. 広告料 ¥800.00 を現金で支拂った。
6. 近藤三郎へ借金 ¥2,000.00 を現金で返した。
7. 借金の利息 ¥80.00 を現金で支拂った。
8. 店員の給料 ¥1,800.00 を現金で支拂った。
9. 石井商店から商品 ¥5,000.00 を掛で仕入れた。
10. 品質不良のため石井商店へ商品全部を返した。

練習題 6. 次の勘定記入はどんな取引を記入したものか、考えてみよう。

1.	現金	3,500.00	商品	3,500.00
2.	現金	5,000.00	借入金	5,000.00
3.	現金	950.00	商品	1,000.00
	商品販賣損	50.00		
4.	貸掛金	2,000.00	商品	2,000.00
5.	商品	1,500.00	買掛金	1,500.00

4. 勘定記入の間違いを防ぐにはどうするか

木原君は取引について、各項目の増加と減少を、それぞれの勘定の借方と貸方とへ注意してつけたが、いろいろな取引があるので、借方・貸方を取り違えはしないか、金額を間違えはしないか心配である。どうすれば間違いなくつけられるか。

木原君といっしょに考えてみよう。

△ここで知っておく必要のあること

勘定記入の間違いを防ぐには直接に勘定に記入しないで、一度、勘定記入の準備をするようにすればよい。その準備はどのようにすればよいか。

取引を勘定に記入するとき、この取引は何勘定の借方へいくら、何勘定の貸方へいくらを書かねばならぬかと考える。この

仕 訳 帳

昭和年	摘要	元	借方	貸方
5 1	(現金) (資本金) 基金を出し合い、学校賣店を始めた		3,000.00	3,000.00
2	(現金) (借入金) P.T.A. から借りた		2,000.00	2,000.00
3	(商品) (現金) 文房具会社から商品を現金で仕入れた		1,500.00	1,500.00
4	(現金) 諸口 (商品) (商品販賣益) 本日賣上		430.70	307.00 33.70
5	(営業費) (現金) 火災保険料を支拂った		120.00	120.00

ように頭で考えたままを帳簿に書いて、この帳簿から勘定へ写すようにすればよい。簿記ではこれを仕訳といって前ページのように書き表わす。この帳簿を仕訳帳といっている。仕訳のほか、取引のあらましを書いておくと、仕訳帳は営業の日誌にもなる。仕訳帳の記入を簡単に示したいときには、これを次のように書き表わす。

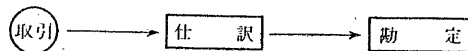
5/1	現	金	3,000.00	資	本	金	3,000.00
2	現	金	2,000.00	借	入	金	2,000.00
3	商	品	1,500.00	現	金		1,500.00
4	現	金	430.70	商	品		397.00
				商品販賣益			33.70
5	営	業	費	120.00	現	金	120.00

仕訳というものは次のような意味を表わしたものである。たとえば5月1日の取引は、

(ア)現金勘定の借方へ ¥3,000.00 を記入せよ。

(イ)資本金勘定の貸方へ ¥3,000.00 を記入せよ。

勘定へは、このさしず通りに写せばよい。これを轉記という。このようにして、簿記で取引を記録計算する順序は次の図のようになる。



練習題7. 練習題4,5の取引を仕訳してみよう。

練習題8. 次の取引を仕訳し、勘定に轉記してみよう。

- 井上一郎から現金 ¥10,000.00 を借りて営業を始めた。
- 田中商店から商品 ¥5,000.00 を現金で仕入れた。

- 田中商店から仕入れた商品のうち、半分は品質不良のため返し、代金は現金で受け取った。
- 山口商店へ原価 ¥2,000.00 の商品を ¥2,500.00 で販賣し、代金は掛とした。
- 建物に火災保険をつけ、保険料 ¥280.00 を現金で支拂った。

練習題9. 次の仕訳はどんな取引の仕訳であるか、考えてみよう。

1. 現	金	8,000.00	借	入	金	8,000.00
2. 商	品	3,000.00	現	金		3,000.00
3. 買	掛	金	1,800.00	現	金	1,800.00
4. 営	業	費	370.00	現	金	370.00
5. 資	本	金	1,000.00	現	金	1,000.00

記 帳 例 題

久保君は、おもちゃ卸商江戸屋の会計係となって、次の取引を整理することになった。

- 6月1日 現金 ¥10,000.00 を元手として営業を始めた。
- 2日 机・いすその他、店用器具を買い入れ、代金 ¥960.00 を現金で支拂った。
- 3日 帳簿・文房具など ¥285.00 を現金で買い入れた。
- 5日 山田製作所から次のとおり仕入れ代金は現金で支拂った。
電車 100 個 @¥80.00 ¥8,000.00
- 8日 木村商店へ次のとおり販賣し、代金は現金で受け取った。
電車 30 個 @¥100.00 ¥3,000.00(原価 ¥2,400.00)
- 10日 太田商店へ次のとおり販賣し、代金は掛とした。
電車 20 個 @¥100.00 ¥2,000.00(原価 ¥1,600.00)
- 15日 小林製作所から次のとおり仕入れ、代金は掛とした。
人形 100 個 @¥40.00 ¥4,000.00
- 18日 木村商店へ次のとおり販賣し、代金は現金で受け取った。
人形 50 個 @¥50.00 ¥2,500.00(原価 ¥2,000.00)

- 20 日 太田商店へ次のとおり販賣し、代金は掛とした。
 電車 20 個 @¥100.00 ¥2,000.00(原価¥1,600.00)
 人形 30 個 " " 50.00 " 1,500.00(原価¥1,200.00)
 25 日 商品賣買を仲介して手数料¥100.00を現金で受け取った。
 28 日 太田商店から賣掛代金 ¥5,000.00 を受け取った。
 30 日 小林製作所へ買掛代金 ¥3,000.00 を現金で支拂った。
 " 日 本月分家賃 ¥350.00, 給料 ¥750.00 を現金で支拂った。

さて、どうすればよいか。久保君はまず仕訳をして、これを元帳へ轉記した。

久保君といっしょにやってみよう。

仕 訳			
6/1 現 金	10,000.00	資 本 金	10,000.00
2 備 品	960.00	現 金	960.00
3 営 業 費	285.00	現 金	285.00
5 商 品	8,000.00	現 金	8,000.00
8 現 金	3,000.00	商 品	2,400.00
		商品販賣益	600.00
10 太田商店	2,000.00	商 品	1,600.00
		商品販賣益	400.00
15 商 品	4,000.00	小林製作所	4,000.00
18 現 金	2,500.00	商 品	2,000.00
		商品販賣益	500.00
20 太田商店	3,500.00	商 品	2,800.00
		商品販賣益	700.00
25 現 金	100.00	受取手数料	100.00
28 現 金	5,000.00	太田商店	5,000.00

- 30 小林製作所 3,000.00 現 金 3,000.00
 " 営 業 費 1,100.00 現 金 1,100.00

元 帳

〔増加を借方とする勘定〕

現 金 1	
(1) 10,000.00	(2) 960.00
(8) 3,000.00	(3) 285.00
(18) 2,500.00	(5) 8,000.00
(25) 100.00	(30) 3,000.00
(28) 5,000.00	" 1,100.00

〔増加を貸方とする勘定〕

小 林 製 作 所 6	
(60) 3,000.00	(65) 4,000.00

太 田 商 店 2	
(10) 2,000.00	(28) 5,000.00
(20) 3,500.00	

資 本 金 7	
	(1) 10,000.00

商 品 3	
(5) 8,000.00	(8) 2,400.00
(15) 4,000.00	(10) 1,600.00
	(18) 2,000.00
	(20) 2,800.00

商 品 販 賣 益 8	
	(8) 600.00
	(10) 400.00
	(18) 500.00
	(20) 700.00

備 品 4	
(2) 960.00	

受 取 手 数 料 9	
	(25) 100.00

営 業 費 5	
(3) 285.00	
(30) 1,100.00	

(注) 賣掛金勘定・買掛金勘定のかわりに、太田商店・小林製作所といふような得意先や仕入先の名称をつけた勘定を用いてもよい。

3. 記録計算のまとめ方

1. どうして検算するか

久保君は仕訳帳から元帳へ轉記をすませた。けれども、轉記は多くの仕訳と多くの勘定にわたっているから、間違いがありはしないか心配である。

さて、これを調べるにはどうしたらよいか。

久保君といっしょに考えてやってみよう。

久保君は、今まで記入した元帳の各勘定の金額を材料にして二つの表を作った。

甲表は元帳の各勘定の借方合計と貸方合計とを集めて作ったものであって、乙表は各勘定の残高を集めて作ったものである。

試 算 表 (甲)

借 方	元 丁	勘 定 科 目	貸 方
20,600.00	1	現 金	13,345.00
5,500.00	2	太 田 商 店	5,000.00
12,000.00	3	商 品	8,800.00
960.00	4	備 品	
1,385.00	5	営 業 費	
3,000.00	6	小 林 製 作 所	4,000.00
	7	資 本	10,000.00
	8	商 品 販 賣 益	2,200.00
	9	受 取 手 数 料	100.00
43,445.00			43,445.00

試 算 表 (乙)

借 方	元 丁	勘 定 科 目	貸 方
7,255.00	1	現 金	
500.00	2	太 田 商 店	
3,200.00	3	商 品	
960.00	4	備 品	
1,385.00	5	営 業 費	
	6	小 林 製 作 所	1,000.00
	7	資 本	10,000.00
	8	商 品 販 賣 益	2,200.00
	9	受 取 手 数 料	100.00
13,300.00			13,300.00

△ここで知らなければならないこと

簿記では甲表を合計試算表と呼び、乙表を残高試算表と呼んで、記帳の正否をためすために、このうちのどれかを作ることとしている。

この表がどうして元帳の検算に役にたつのであろうか。前に取引をいろいろな勘定に記入したとき、必ず一つの取引は二つ以上の勘定に記入し、一つの勘定で借方に記入すれば他の勘定では貸方に記入した。しかも借方に記入した金額と貸方に記入した金額は等しかった。すべての取引がみなそのように借方、貸方に等しい金額で記入されている。それならば取引を記入したすべての勘定の、借方の金額の総合計と、貸方の金額の総合計も等しいはずである。ここが簿記のしくみのいちばん大切なところであって、このことを貸借平均の原則といっている。そこでこの貸借平均の原則によってすべての勘定の借方の総合計

と貸方の総合計とは一致するわけである。したがって、転記に誤りがなければ各勘定の借方合計と貸方合計をもって作った合計試算表の貸借総計は一致するはずである。もし一致しなければそれは転記が誤ったということを証明することになる。そこでそれが一致しなければ誤りを正さなくてはならない。なお、これは仕訳帳の合計とも一致するはずであるから、これと照らし合わせてみるがよい。

残高試算表は全体として見ると、合計試算表の貸借双方から同じ金額を差し引いた残りを表わすものであるから、これもまた貸借一致するはずである。このことは、数学の式で表わせば $A=B$ ならば、 $A-C=B-C$ であるということと同じである。

このような理由で、試算表を作ってみれば、元帳記入が正しいか誤りであるかが、はっきりわかるようになっていて、多くの勘定にわたって行った多くの取引の記入を、検算することができるということが簿記のすぐれた特長である。

試算表はなるべく回数を多く作って計算の正否をためすがよい。ことに決算の前には必ずこれを作ってみなければならない。

練習題 10. 次の勘定について合計試算表と残高試算表を作ってみよう。

現 金 1		買 掛 金 6	
25,870.00	21,529.00	7,610.00	14,180.00
当 座 預 金 2		資 本 金 7	
48,700.00	27,350.00		35,000.00

買 掛 金 3		営 業 費 8	
14,450.00	14,450.00	5,174.00	
商 品 4		商 品 販 賣 益 9	
81,476.00	67,584.00		11,842.00
備 品 5		受 取 利 息 10	
8,700.00			45.00

○合計試算表と残高試算表の長所と短所を比べてみよう。

○このほかに元帳の検算をする方法がないか考えてみよう。

2. 営業成績と営業の現状を表わすにはどうするか

久保君は営業を始めてから今日までいろいろな取引をしてきたが、その結果どれだけの純益あるいは純損が生じたかを計算してみたい。それと共に現金・商品・貸金・借金などの現状を一覧できるようにしたいと思う。この二つのことは、営業者にとって、営業の過去・現在を知るために必要なばかりでなく、将来の経営のやり方を考えるためにも必要であるからである。

さて、どうすればよいか。久保君といっしょに考えてみよう。

久保君は第一に元帳の費用の勘定や利益の勘定を集めて甲表を作り、第二にその他の勘定の残高を集めて乙表を作ってみた。すると両表の純損益は一致した。

〔甲〕 損益計算書			
営業費	1,885.00	商品販賣益	2,200.00
当期純益	915.00	受取手数料	100.00
	<u>2,300.00</u>		<u>2,300.00</u>

〔乙〕 貸借対照表			
現金	7,255.00	小林製作所	1,000.00
太田商店	500.00	資本金	10,000.00
商品	3,200.00	当期純益	915.00
備品	960.00		
	<u>11,915.00</u>		<u>11,915.00</u>

△ここで知らなければならないこと

簿記では甲表を損益計算書と呼び、乙表を貸借対照表と呼んでいる。損益計算書によって一期間の営業成績を知り、貸借対照表によって一定の時に於ける財産の状態を知ることができる。この二つの表は簿記計算の最後に作る大切なものであるが、それは勘定による項目別計算の結果を、このようにまとめて作ったものである。

なお、損益計算書の純益と貸借対照表の純益とが必ず一致することも、簿記の大きな特長なのである。

○損益計算書の借方に集まっているものは何か。貸方に集まっているものは何か。

○貸借対照表の借方に集まっているものを何と呼んだらよいか。貸方のものは何と呼んだらよいか。

○勘定残高の借方・貸方と、損益計算書・貸借対照表の借方・

貸方の関係はどうなっているか。

3. 勘定はどう始末するか

久保君は今まで使ってきた元帳を次期にも引き続いて使うのではあるが、紙面の上で当期分と次期分とがはっきり区別できるようにしたいと思う。

さて、どうすればよいか。久保君といっしょに考えてみよう。

△ここで知っておく必要のあること

簿記ではこの手続を締め切りと呼んでいるが、勘定の中には現金・商品・貸金・借金などのように、その有高がそのまま次期へ引き継がれてゆくものと、損失費用・利益のようにこれをまとめて純損益を計算して、終りとなるものがある。したがって勘定の締め切り方は二種類となる。

(ア) 損失費用・利益諸勘定の締め切り

損益という特別な勘定を設けて、これに残高を集めて純損益を計算する。残高を損益勘定へ移すと、それらの勘定は貸借平均するから、簿記の方法で二本線を引いて締め切りとする。損益勘定で計算された純損益は資本金勘定へ移すこととする。純損益を資本金勘定へ移すわけは、純損益は出資者のものであるから、純利益ならば資本金の増加となり、純損失ならば資本金の減少となるからである。

なお、この手続は、残高が勘定から勘定へ移るので、ふつうの取引と同様に、仕訳して轉記する方法をとって間違いを防ぐようにする。

(イ) その他の勘定の締め切り

残高を金額の少ない側に次期繰越として記入し、貸借平均させて同じ行で締め切り、次期繰越と反対側に前期繰越としてこの残高を記入し、次期の取引に続けるようにする。

久保君のやった締め切りは次のようになった。

損 益 勘 定			
営 業 費 5		受 取 手 数 料 9	
(3) 285.00	(30) 1,385.00	(30) 100.00	(25) 100.00
(30) 1,100.00		100.00	100.00
1,385.00	1,385.00		

商 品 販 賣 益 8		損 益 10	
(30) 2,200.00	(8) 600.00	(30) 1,385.00	(30) 2,200.00
	(10) 400.00	" 915.00	" 100.00
	(13) 500.00	2,300.00	2,300.00
	(20) 700.00		
2,200.00	2,200.00		

資 本 金 7	
(1) 10,000.00	
(30) 915.00	

仕 訳

6/30 損 益	1,385.00	営 業 費	1,385.00
" 商品販賣益	2,200.00	損 益	2,200.00
" 受取手数料	100.00	損 益	100.00
" 損 益	915.00	資 本 金	915.00

そ の 他 の 勘 定

現 金 1		備 品 4	
(1) 10,000.00	(2) 960.00	(2) 960.00	次期繰越 960.00
(8) 3,000.00	(3) 285.00	960.00	960.00
(13) 2,500.00	(5) 8,000.00	前期繰越 960.00	
(25) 100.00	(30) 3,000.00		
(28) 5,000.00	" 1,100.00		
	次期繰越		
	7,255.00		
20,600.00	20,600.00		
前期繰越			
7,255.00			

太 田 商 店 2		小 林 製 作 所 6	
(10) 2,000.00	(25) 5,000.00	(30) 3,000.00	(5) 4,000.00
(20) 3,500.00	次期繰越 500.00	次期繰越	
5,500.00	5,500.00	1,000.00	
前期繰越 500.00		4,000.00	4,000.00
		前期繰越	1,000.00

商 品 3		資 本 金 7	
(5) 8,000.00	(8) 2,400.00	次期繰越	(1) 10,000.00
(15) 4,000.00	(10) 1,600.00	10,915.00	(30) 915.00
	(13) 2,000.00		10,915.00
	(20) 2,800.00	10,915.00	
	次期繰越		前期繰越
	3,200.00		10,915.00
12,000.00	12,000.00		
前期繰越			
3,200.00			

このような元帳締切の手続は、ふつうは、損益計算書・貸借対照表を作る前に行う。

練習題 11. 次の勘定記入について残高試算表を作り、勘定を締め切ら

て損益計算書と貸借対照表を作ってみよう。

<table> <tr><td colspan="2">現金 1</td></tr> <tr><td>45,000.00</td><td>38,750.00</td></tr> </table>	現金 1		45,000.00	38,750.00	<table> <tr><td colspan="2">戸田商店 6</td></tr> <tr><td>10,000.00</td><td>10,840.00</td></tr> </table>	戸田商店 6		10,000.00	10,840.00
現金 1									
45,000.00	38,750.00								
戸田商店 6									
10,000.00	10,840.00								
<table> <tr><td colspan="2">永田商店 2</td></tr> <tr><td>12,500.00</td><td>9,500.00</td></tr> </table>	永田商店 2		12,500.00	9,500.00	<table> <tr><td colspan="2">資本金 7</td></tr> <tr><td></td><td>20,000.00</td></tr> </table>	資本金 7			20,000.00
永田商店 2									
12,500.00	9,500.00								
資本金 7									
	20,000.00								
<table> <tr><td colspan="2">商品 3</td></tr> <tr><td>95,600.00</td><td>84,250.00</td></tr> </table>	商品 3		95,600.00	84,250.00	<table> <tr><td colspan="2">商品販賣益 8</td></tr> <tr><td></td><td>8,725.00</td></tr> </table>	商品販賣益 8			8,725.00
商品 3									
95,600.00	84,250.00								
商品販賣益 8									
	8,725.00								
<table> <tr><td colspan="2">備品 4</td></tr> <tr><td>6,500.00</td><td></td></tr> </table>	備品 4		6,500.00		<table> <tr><td colspan="2">受取利息 9</td></tr> <tr><td></td><td>78.00</td></tr> </table>	受取利息 9			78.00
備品 4									
6,500.00									
受取利息 9									
	78.00								
<table> <tr><td colspan="2">営業費 5</td></tr> <tr><td>2,543.00</td><td></td></tr> </table>	営業費 5		2,543.00						
営業費 5									
2,543.00									

4. 帳簿

1. 帳簿はどうつけるか

帳簿は自分だけの覚書とちがいで、だれが見てもはっきりわかるように正確に、またはっきりと記帳しなければならない。そればかりでなく、先の記帳と後の記帳との連絡を考えて、記帳や参照に都合がよいようにくふうする必要がある。

それには、簿記の一般的習慣があるから、それを心得て記帳するとよい。

△ここで知っておく必要のあること

(ア)帳簿には順を追って毎ページに丁数を書き入れること。その位置は上部の欄外、紙のとじ口の反対側とすること。ただし、つづりこみ帳簿には、通常、丁数が印刷されている。

(イ)文字は、かい書または行書とし、はっきり記入すること。

(ウ)文字や数字の大きさは、行線間隔の二分の一ぐらいとし、必要に応じて三分の二ぐらいとする。そして文字も数字も必ず下の行線に接して記入し、上部に余白を残すこと。

(エ)数字は四以上三けたごとにコンマ(・)で区切ること。また、四位・十位・百位などの数が、上から下へまっすぐにならぶように書き、その合計・差引をするのに便利ようにする。

(オ)誤字や誤記を訂正するには、赤の二重線を引いてこれを消し、その上部に正しい記入をする。文字は誤字だけを訂正するが、数字は、たとえ一字の誤りがあるときでも全部を消して正

しく書き直す。

ゴムまたは薬品で消したり、小刀で削り取り、もしくははり紙などをしてはならない。

(カ)記入を簡略にするため次のような符号を用いる。

¥ (円) @ (替……単価を示す) # (第……号)

" (同上) a/c (勘定) $\%$ ($\frac{1}{100}$)

√ (記帳済みまたは照合済み印) 10.— (10.00)

(キ)仕訳帳に一取引を二ページにまたがって記入しないこと。
そして最後の行で繰越の手続をし、そのため余白が生じた場合は、斜線を引いて記入のできないようにしておくこと。

(ク)帳簿に用いる線は赤線とすること。

仕訳帳や元帳をつける際には、特に次の事項を心得ている必要がある。

(一)仕訳帳の摘要欄に書く勘定科目はやや大きく書き、仕訳の次にその取引のあらましを書くようにする。これを日記と呼んでいる。元丁欄には、その科目を元帳へ転記したとき転記済みの印として、その勘定ののっている元帳のページ数を記入する。これは参照のためにも役だつものである。

(ニ)元帳の摘要欄へは仕訳の相手科目を記入する習慣となっている。ただし相手科目が二つ以上あるときは諸口と書く。摘要はなるべく簡単に、そのうえわかりよく書くことが必要であるので、元帳では相手科目だけ書いてあれば、その取引を想像することができるからである。仕丁欄は仕訳帳の元丁欄と対応するもので、その取引が仕訳された仕訳帳のページ数を記入する。

練習題 12. 次の勘定記入はどんな取引を転記したものか、考えてみよう。

1.	現 金
	6/10 商 品 5,000.00
2.	伊 藤 商 店
	6/15 商 品 3,000.00
3.	杉 村 商 店
	6/18 商 品 4,000.00
4.	当 座 預 金
	6/20 現 金 3,000.00
5.	商 品
	6/30 高村商店 5,000.00

以上の心得にしたがって久保君は江戸屋の例題を記帳してみた。それは次のようになった。

仕 訳 帳

1

昭 和 年	摘 要	元 丁	借 方	貸 方
6 1	(現 金)	1	10,000.00	
	(資 本 金)	6		10,000.00
	現金出資開業			
2	(備 品)	4	960.00	
	(現 金)	1		960.00
	店用器具一式買い入れ			
3	(営 業 費)	7	285.00	
	(現 金)	1		285.00
	帳簿及び文房具買い入れ			
5	(商 品)	3	8,000.00	
	(現 金)	1		8,000.00
	山田製作所から商品仕入れ			
8	(現 金) 諸 口	1	3,000.00	
	(商 品)	3		2,400.00
	(商品販賣益)	8		600.00
	木村商店へ商品現金買り			
10	(太 田 商 店) 諸 口	2	2,000.00	
	(商 品)	3		1,600.00
	(商品販賣益)	8		400.00
	太田商店へ商品掛買り			
	次 へ		24,245.00	24,245.00

仕 訳 帳

2

昭 和 年	摘 要	元 丁	借 方	貸 方
6 15	前より		24,245.00	24,245.00
	(商 品)	3	4,000.00	
	(小林製作所)	5		4,000.00
	小林製作所から商品掛仕入れ			
18	(現 金) 諸 口	1	2,500.00	
	(商 品)	3		2,000.00
	(商品販賣益)	8		500.00
	本村商店へ商品現金買り			
20	(太 田 商 店) 諸 口	2	3,500.00	
	(商 品)	3		2,800.00
	(商品販賣益)	8		700.00
	太田商店へ商品掛買り			
25	(現 金)	1	100.00	
	(受取手数料)	9		100.00
	商品買の仲介をなし手数料受け入れ			
28	(現 金)	1	5,000.00	
	(太 田 商 店)	2		5,000.00
	太田商店から買掛代金受け入れ			
30	(小林製作所)	5	3,000.00	
	(現 金)	1		3,000.00
	小林製作所へ買掛代金支払い、			
	次 へ		42,345.00	42,345.00

仕 訳 帳

昭和年		摘要	元丁	借方	貸方
6	30	前より		42,345.00	42,345.00
		(営業費)	7	1,100.00	
		(現金)	1		1,100.00
		本月分家賃・給料支拂い、			
				43,445.00	43,445.00
6	30	決算仕訳			
		(損益)	10	1,385.00	
		(営業費)	7		1,385.00
		当期営業費を損益勘定に振り替え			
"		(商品販賣益)	8	2,200.00	
					2,200.00
"		(損益)	10		
"		(受取手数料)	9	100.00	
					100.00
"		(損益)	10		
				915.00	915.00
				4,600.00	4,600.00

現 金

昭和年	摘要		仕丁	金額	昭和年	摘要		仕丁	金額
6	1	資本金	1	10,000.00	6	2	備品	1	960.00
	8	諸口	1	3,000.00		3	營業費	1	285.00
	18	"	2	2,500.00		5	商品	1	8,000.00
	25	受取手数料	2	100.00		30	小林製作所	2	3,000.00
	28	太田商店	2	5,000.00		"	營業費	3	1,100.00
				20,600.00		"	次期繰越	✓	7,255.00
									20,600.00
7	1	前期繰越	✓	7,255.00					

太 田 商 店

6	10	諸口	1	2,000.00	6	28	現金	2	5,000.00
	20	"	2	3,500.00		30	次期繰越	✓	500.00
				5,500.00					5,500.00
7	1	前期繰越	✓	500.00					

商 品

6	5	現金	1	8,000.00	6	8	現金	1	2,400.00
	15	小林製作所	2	4,000.00		10	太田商店	1	1,600.00
						18	現金	2	2,000.00
						20	太田商店	2	2,300.00
						30	次期繰越	✓	3,200.00
				12,000.00					12,000.00
7	1	前期繰越	✓	3,200.00					

備 品

6	2	現金	1	960.00	6	30	次期繰越	✓	960.00
				960.00					960.00
7	1	前期繰越	✓	960.00					

小林製作所

5

昭和年	摘要	仕丁	金額	昭和年	摘要	仕丁	金額
6 30	現金	2	3,000.00	6 15	商品	2	4,000.00
"	次期繰越	✓	1,000.00				
			4,000.00				4,000.00
				7 1	前期繰越	✓	1,000.00

資本金

6

6 30	次期繰越	✓	10,915.00	6 1	現金	1	10,000.00
				30	損益	3	915.00
			10,915.00				10,915.00
				7 1	前期繰越	✓	10,915.00

営業費

7

6 3	現金	1	285.00	6 30	損益	3	1,385.00
30	"	3	1,100.00				
			1,385.00				1,385.00

商品販賣益

8

6 30	損益	3	2,200.00	6 8	現金	1	600.00
				10	太田商店	1	400.00
				18	現金	2	500.00
				20	太田商店	2	700.00
			2,200.00				2,200.00

受取手数料

9

6 30	損益	3	100.00	6 25	現金	2	100.00
			100.00				100.00

損益

10

昭和年	摘要	仕丁	金額	昭和年	摘要	仕丁	金額
6 30	営業費	3	1,385.00	6 30	商品販賣益	3	2,200.00
"	資本金	3	915.00	"	受取手数料	3	100.00
			2,300.00				2,300.00

損益計算書

自昭和 年 6 月 1 日 至昭和 年 6 月 30 日

損失	金額	利益	金額
営業費	1,385.00	商品販賣益	2,200.00
当期純利益	915.00	受取手数料	100.00
	2,300.00		2,300.00

貸借対照表

昭和 年 6 月 30 日

資産	金額	負債及び資本	金額
現金	7,255.00	小林製作所	1,000.00
太田商店	500.00	資本金	10,915.00
商品	3,200.00	元入金 ¥10,000.00	
備品	960.00	当期純利益 "	915.00
	11,915.00		11,915.00

2. 補助簿はどうつけるか

仕訳帳と元帳をつけることによって営業全体の記録計算をすることはできるが、重要な取引についてはさらに詳細な記録計算を必要とするものがある。現金の出納、商品の仕入・売上、仕入先や得意先との貸借などは元帳記録のほかにこれを補う詳

細な記録がほしい。どうすればよいか。

△ここで知っておく必要のあること

簿記で使用する帳簿は主要簿と補助簿とに分けられる。主要簿は仕訳帳及び元帳のことであって、補助簿は特殊な取引や重要な勘定に関する詳細を記録して、主要簿の不充分なところを補い、または主要簿の記録と対照して、その正否を検査するために設けられる帳簿である。補助簿は営業の種類や規模の大小によってさまざまなものが使用されるが、商業簿記でふつうに使用されるものは、現金出納帳・仕入帳・売上帳・買掛金元帳・買掛金元帳・商品有高帳などである。帳簿の記入は補助簿のある場合は、まずそれに記入し、次に仕訳帳に記入し、最後に元帳へ転記する。

(ア) 現金出納帳

この帳簿は元帳の現金勘定の詳細を書く帳簿であって、その形式は6ページのものと同一である。

(イ) 仕入帳

この帳簿は商品仕入に関する詳細を書く帳簿である。品違いやその他の理由で仕入先へもどしたときは、この帳簿へ赤イン

仕 入 帳

昭 和 年	摘 要	内 訳	金 額
6	5 山田製作所 現金		
	電車 100個 @ ¥80.00		8,000.00
	15 小林製作所 掛		
	人形 100個 @ ¥40.00		4,000.00
			12,000.00

キで記入する。これは黒字と反対の意味であるから、締め切りのとき黒字合計から赤字合計を差し引いて純仕入高を計算する。金額欄を一つしか使わない帳簿で減少を表わすにはこのような方法によることも簿記の特長である。

(ウ) 売上帳

この帳簿は商品売上に関する詳細を書く帳簿である。その内容・記入方法は仕入帳とほぼ同じである。

賣 上 帳

昭 和 年	摘 要	内 訳	金 額
6	8 木村商店 現金		
	電車 30個 @ ¥100.00		3,000.00
	10 太田商店 掛		
	電車 20個 @ ¥100.00		2,000.00
	18 木村商店 現金		
	人形 50個 @ ¥50.00		2,500.00
	20 太田商店 掛		
	電車 20個 @ ¥100.00	2,000.00	
	人形 30個 @ ¥50.00	1,500.00	3,500.00
			11,000.00

(エ) 商品有高帳

商品の受渡しを記録し、その現在高を明らかにするために設ける帳簿である。商品の種類、品目別に勘定を設けて、仕入のとき受入欄に、売上るとき引渡欄に記入して、その都度残高を出しておく。引渡金額は仕入原価で記入する。

商品有高帳

電 車 単位個

昭和 年	摘 要	受 入 高			引 渡 高			残 高		
		数量	単価	金 額	数量	単価	金 額	数量	単価	金 額
6	5 山田製作所	100	80.00	8,000.00				100	80.00	8,000.00
	8 木村商店				30	80.00	2,400.00	70	80.00	5,600.00
	10 太田商店				20	80.00	1,600.00	50	80.00	4,000.00
	20 "				20	80.00	1,600.00	30	80.00	2,400.00
	31 次期繰越				30	80.00	2,400.00			
		100		8,000.00	100		8,000.00			
7	1 前期繰越	30	80.00	2,400.00				30	80.00	2,400.00

(オ) 賣掛金元帳

賣掛金勘定の内訳を示す帳簿であって、得意先ごとにその名前をつけた勘定口座を設けて記入する。このような勘定を人名勘定という。また勘定を記入する場所を口座といっている。

(カ) 買掛金元帳

買掛金勘定の内訳を示す帳簿であって、仕入先ごとに口座を設けて記入する。

賣掛金元帳・買掛金元帳のような補助元帳に対して、主要簿としての元帳を特に総勘定元帳といっている。

これらの補助元帳は総勘定元帳に賣掛金勘定・買掛金勘定を用いたときのみに使われる帳簿であって、江戸屋の例題のように総勘定元帳に直接人名勘定を用いたときはその必要がない。

補助元帳の人名勘定の形式や記入法は、賣掛金勘定・買掛金勘定の場合とほぼ同じである。

○主要簿のどの勘定とどの補助簿とを照合するかを整理して

表を作ってみよう。

○人名勘定を用いるとどんな長所・短所があるか。

○口座を設けて記入する補助簿は何か。

記帳練習例題

第一例題

主要簿 仕訳帳・元帳

補助簿 現金出納帳

勘定科目

- | | | | |
|------------|------|---------------|-----|
| 1. 現 金 | 10 行 | 8. 資 本 金 | 4 行 |
| 2. 伊 藤 商 店 | 4 " | 9. 営 業 費 | 2 " |
| 3. 小 山 商 店 | 4 " | 10. 支 拂 利 息 | 2 " |
| 4. 商 品 | 8 " | 11. 商 品 販 賣 益 | 6 " |
| 5. 備 品 | 3 " | 12. 受 取 手 数 料 | 2 " |
| 6. 山 田 商 店 | 4 " | 13. 損 益 | 4 " |
| 7. 借 入 金 | 2 " | | |
- 7 月 1 日 現金 ¥20,000.00 を元手として文房具商を始めた。
- 3 日 机・いすその他、店用器具を買い入れ、代金 ¥840.00 は現金で支拂った。
- 5 日 大川商会から次のとおり仕入れ、代金は現金で支拂った。
月印鉛筆 300 ダース @¥50.00 ¥15,000.00
- 8 日 小山商店へ次のとおり販賣し、代金は現金で受け取った。
月印鉛筆 50 ダース @¥60.00 ¥3,000.00
(原価 ¥2,500.00)
- 11 日 伊藤商店へ次のとおり販賣し、代金は掛とした。
月印鉛筆 30 ダース @¥60.00 ¥1,800.00
(原価 ¥1,500.00)
- 15 日 関東銀行から現金 ¥5,000.00 を借りた。
- 17 日 山田商会から次のとおり仕入れ、代金のうち半額は現金

で支拂い、残りは掛とした。

花印クレヨン 500 個 @¥35.00 ¥17,500.00

19 日 小山商店へ次のとおり販賣し、代金のうち半額は現金で受け取り、残りは掛とした。

月印鉛筆 100 ダース @¥59.00 ¥5,900.00
(原價 ¥5,000.00)

21 日 森田商店へ次のとおり販賣し、代金は現金で受け取った。

花印クレヨン 200 個 @¥41.50 ¥8,300.00
(原價 ¥7,000.00)

23 日 伊藤商店へ次のとおり販賣し、代金のうち半額は現金で受け取り、残りは掛とした。

月印鉛筆 50 ダース @¥60.00 ¥3,000.00
(原價 ¥2,500.00)

花印クレヨン 100 個 " " ¥42.00 " ¥4,200.00
(原價 ¥3,500.00)

24 日 商品賣買の仲介をなし、手数料 ¥250.00 を現金で受け取った。

26 日 次のとおり賣掛代金を現金で受け取った。

伊藤商店 ¥5,000.00 小山商店 ¥2,000.00

28 日 関東銀行へ借入金を返し、元金 ¥5,000.00 及び利息 ¥24.00 を現金で支拂った。

29 日 山田商会へ買掛代金として ¥8,000.00 を現金で支拂った。

31 日 本月分家賃 ¥400.00、給料 ¥1,200.00 を現金で支拂った。

" 本日決算を行い、貸借対照表と損益計算書とを作り、純損益の一致することをたしかめた。

なお、合計試算表は次のようになるはずである。

合 計 試 算 表

借 方	元 丁	勘 定 科 目	貸 方
50,100.00	1	現 金	39,214.00
5,400.00	2	伊 藤 商 店	5,000.00
2,950.00	3	小 山 商 店	2,000.00
32,500.00	4	商 品	22,000.00
840.00	5	備 品	
8,000.00	6	山 田 商 店	8,750.00
5,000.00	7	借 入 金	5,000.00
	8	資 本	20,000.00
1,600.00	9	営 業 費	
240.00	10	支 拂 利 息	
	11	商 品 販 賣 益	4,200.00
	12	受 取 手 数 料	250.00
106,414.00			106,414.00

5. 勘定科目と勘定記入の法則

1. 勘定科目はどう分類されるか、勘定記入の法則はどうなるか

簿記は勘定という形式を用いて、取引を項目別に記録計算するが、この項目のことを勘定科目といっている。

これまでいろいろな勘定科目を使ってきたわけであるが、考えてみると、勘定の中には性質の似たものがあるし、貸借記入法の同じものがある。勘定記入法は現金勘定をもとにして導き出したもので、個々ばらばらでは覚えるにも不便である。これをまとめて勘定記入の法則を立てることができれば、仕訳をするにしても、勘定に記入するにしても、また損益計算書や貸借対照表を作るにしても便利である。

さて、どう分類したらよいだろうか。

(ア)今までにわかったように、勘定には増加を借方に書くものと、増加を貸方に書くものがある。まず、このことを基準にして分類してみよう。

(借方系統の勘定)	(貸方系統の勘定)
増加を借方に書く勘定	増加を貸方に書く勘定
現金	買掛金
当座預金	(人名勘定)
賣掛金	借入金
(人名勘定)	
貸付金	資本金
商 品	

備 品	商品販賣益
建 物	受取手数料
土 地	受 取 利 息

商品販賣損
営 業 費
減價償却費
雑 費
支 拂 利 息

(イ)次に借方系統の勘定のなかで、当座預金・買掛金・貸付金・商品・備品・建物・土地は、現金と共通した性質がある。それは借方系統の営業費・支拂利息・雑費・減價償却費・商品販賣損とはちがった性質であって、後のものはまたそれらに共通した性質を持っている。この共通した性質はどうかである。また、適当な名称をつけるとすれば、何といったらよいだろうか。

前のものに共通したことは、ふつうの言葉で財産ということである。財産は、決算をして締め切っても次期に繰り越されてゆくものである。

後のものは、決算をして締め切れば、残高は損益計算に組み入れられて、その勘定の残高はなくなる。次期はまた次期で新しく繰越なしで記入されてゆくものである。これらは、費用とか損失とか、あるいはまとめて損費と呼ぶのがふつうである。

(ウ)次に貸方系統の勘定のなかでも同じように、共通した性質によって分類してみると、買掛金と借入金は同じ借金の種類であり、資本金は元手であり、商品販賣益・受取手数料・受取利

息は利益であるから、三つの種類に分けることができる。簿記で用いられる言葉として、借金のことを負債、元手のことを資本、利益のことを収益と呼んでいる。

(エ)そこで今までわかったことを、まとめてみると次のようになる。

借方系統勘定		貸方系統勘定	
財	産	負	債
損	費	資	本
		収	益

しかし、財産という言葉は財産目録などという場合には、ふつうの財産のほかには負債をふくめて用いている。この場合には、積極財産とか消極財産とかいって区別している。それで、ただ財産といったのではまぎらわしくなるので、借方系統の財産だけのことをいい表わす特別な言葉が必要になってくる。このために、資産という言葉が簿記では用いられる。そこで上の表を正しく書いてみると次のようになる。

借方系統勘定		貸方系統勘定	
資	産	負	債
損	費	資	本
		収	益

さらに、資産の勘定と負債・資本の勘定とは、決算のとき、貸借対照表に記入されるから、この両方を合わせて貸借対照表勘定ということもある。同様に、損費と収益は損益計算書に記入されるので、これを合わせて損益計算書勘定ということもある。この分類は、決算のとき、これらの表を作成するとき役に

たつものである。

前の関係を丁字形で表わすと次のようになる。これを勘定記入法則という。

貸借対照表勘定

資 産 勘 定		負 債 勘 定	
増	加	増	加
		資 本 勘 定	
		増	加

損益計算書勘定

損 費 勘 定		収 益 勘 定	
増	加	増	加

(減少はそれぞれ増加の反対側である)

○このほかどんな分類の仕方があるか。

考えてみると、このような勘定記入法則に到達した一番のものは、現金勘定の記入法がその増加を、ふつう借方に記入するということであった。これからすべての勘定の記入法が順にきまり、これをまとめてみると、資産・負債・資本・損費・収益の記入法則となったのである。ここで今一度、現金勘定で増加を借方に記入することの意味を考えてみよう。それには残高試算表を調べてみるとよい。

残高試算表は、前にわかったとおり、借方総合計と貸方総合

計は相等しいのであるから、次の式で示すことができる。

$$\text{資 産} + \text{損 費} = \text{負 債} + \text{資 本} + \text{収 益}$$

損費と収益の差は純損益であって、純益は結局それだけ資本が増加したことを意味し、純損は資本が減少したことを意味する。そこで、これらは資本の中にふくめて考えることができる。そうすると次の式ができる。

$$\text{資 産} = \text{負 債} + \text{資 本}$$

さらに、負債は営業主が出資した自己資本と区別して、他人が出資した資本とも考えられるから、これも資本の中にふくめて考えることもできる。そこで次の式ができる。

$$\text{資 産} = \text{資 本}$$

この式は、営業の資産の総額は常に資本の総額に等しいことを示している。そして、資産の総額に増減がある場合には、必ず他方で資本の総額にも増減があることを示している。資産は種類によって勘定を設け、資本はだれの出資に属するかによって勘定を設けるが、勘定全体として、資産の計算と資本の計算とが借方と貸方とで平均するようにするには、勘定記入の法則を資産と資本と反対にしておくがよい。ここで、資産の増加を借方、資本の増加を貸方ときめるか、これと反対に資産の増加を貸方、資本の増加を借方ときめるか、二通りのきめ方が考えられるが、ふつうは前の方をとっている。そこで現金勘定は資産勘定であるから、その増加が借方となるのである。

資産と資本の記入法則がきまれば、負債は他人資本を意味するから、資本の法則により増加が貸方となり、収益は資本の増

加を意味するから、やはりその増加が貸方となり、損費は反対に資本の減少を意味するから、その増加が借方となる。このように勘定記入法則は理論的にもきめることができるのである。

練習題 13. 次の資産・負債を持った営業の資本はいくらか。

現 金 ￥2,150.00 資掛金 ￥1,650.00 商 品 ￥2,850.00
建物・備品 ￥2,500.00 借入金 ￥1,000.00 買掛金 ￥500.00

2. 簿記のしくみの特長

貸借対照表の純損益と損益計算書の純損益はなぜ一致するのだろうか。この二つの決算表で計算される純損益の金額が必ず一致するということが、簿記の特長であることは前に習った。別々に計算された金額が、必ず一致するところに簿記の巧妙なしくみがあるのだが、その理由を、今までにわかったことから考えてみよう。貸借対照表も損益計算書も、その項目と金額は残高試算表からとってくるものである。その残高試算表は、

$$(ア) \text{ 資 産} + \text{損 費} = \text{負 債} + \text{資 本} + \text{収 益}$$

という等式関係でなりたっている。そこで数学で習ったことを應用して損費を右辺へ移項し、負債と資本とを左辺へ移項してみると、

$$(イ) \text{ 資 産} - (\text{負債} + \text{資本}) = \text{収 益} - \text{損 費}$$

となる。この等式の左辺の答が貸借対照表に出てくる純損益であり、右辺の答が損益計算書に出てくる純損益である。そしてこれが等しいのである。この数値が正であれば純益であり、負であれば純損であることはいうまでもない。

○貸借対照表の純利益と損益計算書の純利益とが一致する理由は、他の方法でも証明できる。どんな方法があるか考えてみよう。

△財産計算と損益計算

さて(イ)の式をよく観察してみると次のことがわかる。すなわち、左辺の項目は資産と負債と資本とであって、これだけとり出してみると

$$(イ) \text{ 資 産} - (\text{負 債} + \text{資 本}) = \text{純利益}$$

となる。さらにこの式を変形すると

$$(ロ) \text{ 資 産} - \text{負 債} = \text{資 本} + \text{純利益}$$

となる。この資本というのは、もともとあった資本すなわち、ある営業期のはじめにあった資本の意味であるから、期末の資本は、純利益の金額だけ増加したのである。この資本の増加があるためには、(ロ)の式から考えて左辺の資産に増加があるか、負債に減少があるか、またはその両方があることが必要である。すなわち増減した資産と負債とを比較してその差額を出し、その差額すなわち期末資本と、期首資本とを比較して純損益を計算するというのが(ロ)の式の意味である。これは結局、資産と負債という財産の項目を材料とした計算であるから財産計算といえることができる。

つぎに(イ)の式の右辺だけをとり出してみると

$$(ハ) \text{ 収 益} - \text{損 費} = \text{純利益}$$

となり、これはその営業期間中に生じた、収益と損費とを比較して純損益を計算することであるから損益計算というわけであ

る。こうしてみると結局、貸借対照表では財産計算を行い、損益計算書では名のように損益計算を行うのであって、しかも財産計算で出た純損益も、損益計算で出た純損益も、(イ)の式によって等しい金額であるはずである。

このように別々の計算で出た純損益の金額が等しいということによって、この計算が正しいということを証明できることが、簿記の重要な特色なのである。そしてこうした特色を出すために、取引を記帳するのに必ず相対する項目に分けて両面から複記式に行うのである。

○複式簿記という言葉の意味を考えてみよう。

3. 勘定科目について特に注意すること

(ア) 現金勘定

今まで記帳してきたような通貨のほか、他人から受け取った小切手・送金手形・郵便為替証書・振替貯金拂出証書など、現金と同様にみることができるものは、みなその増減がこの勘定で処理される。

(イ) 当座預金勘定

この勘定は銀行との当座取引を処理する勘定で、預け入れたとき借方に、小切手を振り出したとき貸方に記入する。

(ロ) 賣掛金勘定・買掛金勘定

この勘定は商品を掛で賣ったときの貸金と、掛で買ったときの借金を処理する勘定で、仕入先や得意先の数が多いときには総勘定元帳にこの勘定を統括的に使って、別に賣掛金元帳・買

掛金元帳という補助元帳を設け、それに人名勘定を用いて、内訳をはっきりさせなければならない。

(四) 商品勘定

この勘定は資産勘定であって、その増加すなわち商品の仕入及び引取運賃などの仕入費用を借方に記入し、その減少すなわち販賣のとき原価で貸方に記入するから、その残高は商品の有高を示す。販賣のときに生ずる損益は別に商品販賣益・商品販賣損勘定を設けて処理する。けれども、小賣商店などのようにいろいろな商品を小口に販賣するところでは、販賣ごとに原価と損益とを区別計算することが實際上困難であるから、商品勘定の貸方へは賣價のままで記入する方がふつうである。こうすると商品勘定に損益の金額がまじって記入されることとなり、その残高は商品の有高を示さないこととなる。このようになった商品勘定を混合勘定といっている。

混合勘定となった商品勘定では、期末に商品販賣損益を一括して計算するが、どうして計算したらよいだろうか。また商品有高はどうして調べたらよいだろうか。

商品販賣損益は、販賣した商品の原価とその賣價とを比べてみれば計算されるわけである。これを式で表わせれば次のようになる。

$$\text{販賣損益} = \text{販賣高} - \text{販賣原價}$$

販賣高は、商品勘定の貸方の金額ですぐわかるが、販賣原價はどうしてわかるだろうか。商品勘定の借方の金額は、前期からの繰越高があればそれと、当期間中の仕入高との合計であっ

て、これは、その全部が賣り切れた場合でなければ、そのままでは販賣原價にはならない。すなわち、ふつうは賣れ残り高があるから、それを期末にたな卸しをして実地にその金額を調べる。こうして商品の有高をたしかめておいて、それを商品勘定の借方の金額から差し引くと、販賣した商品の原價がわかるわけである。これを式で表わすと次のようになる。

$$\text{販賣原價} = \text{前期繰越高} + \text{仕入高} - \text{期末たな卸高}$$

この販賣原價と販賣高とを比較すれば、販賣損益はわかってくるのであるが、これを、商品勘定の上で計算するにはどうしたらよいだろうか。まず期末たな卸高を借方から差し引かなければならないが、勘定では、借方から差し引くかわりに、貸方に加えるのがふつうである。それは、借方・貸方は反対の性質をもっているから、借方から引くかわりに貸方に加えても借方・貸方の差額は等しいからである。こうしてまず期末たな卸高を貸方へ次期繰越として記入する。そうすると貸方は、販賣高と期末たな卸高の合計になる。この金額はそれだけでは、意味のないものである。この金額と借方の金額との差額を求める。その場合、貸方が多ければ販賣益で、もし借方が多ければ販賣損になる。したがって販賣益の計算は次のように行う。

$$\text{販賣益} = \text{販賣高} + \text{期末たな卸高} - (\text{前期繰越高} + \text{仕入高})$$

販賣益があるのがふつうであるから、貸方が多い場合を式で表わしてみると、商品勘定の記入は次のようになる。

$$\begin{array}{cc} (\text{借} & \text{方}) & (\text{貸} & \text{方}) \end{array}$$

$$\text{前期繰越高} + \text{仕入高} + \text{販賣益} = \text{販賣高} + \text{期末たな卸高}$$

このようにして、混合勘定となった商品勘定は、期末に商品販賣損益を一度にまとめて計算する。そして、これを商品販賣益勘定または商品販賣損勘定に移すか、あるいは直接に損益勘定へ移す。

江戸屋でこの記帳法をとったとすれば、商品勘定は次のようになり、期末たな卸高は $\text{¥}3,200.00$ であるから、商品販賣益の計算は次のようになる。

商 品		商品販賣益	
(5) 8,000.00	(8) 3,000.00		(30) 2,200.00
(15) 4,000.00	(10) 2,000.00		
(30) 2,200.00	(18) 2,500.00		
	(20) 3,500.00		
	次期繰越 3,200.00		
14,200.00	14,200.00		

(仕訳) 6/30 商品 2,200.00 商品販賣益 2,200.00

(イ) 備品・建物勘定

机・いす・金銭登録器・タイプライター・電話・金庫・自轉車・時計などのような営業上用いられる物を備品またはじゅう器といっている。備品や建物は資産勘定であるから、その増加が借方に記入され、減少が貸方に記入される。備品・建物は買入や新築によって増加することはいうまでもないが、これらが減少する場合はどんなときであるかを考えてみよう。備品や建物が不要となって賣却するとか、破損して使用できなくなるとか、火災・盗難にかかるとかいうような場合もあるが、このほか、時が経るにつれて、古くなったり摩滅したりして、だんだん値うちが減るといことがある。このような減価もまた備品・

建物勘定の貸方に記入しなければならない。ここで問題となることは、その減価額をどうしてきめ、これをいつ記入するかということである。

この減価額はふつう次のようにして計算される。

$$\frac{\text{買入原價} - \text{残存價格}}{\text{耐用年数}} = \text{一年の償却高}$$

この償却高を期末に備品・建物勘定の貸方に記入すればよい。

このような手続を減価償却といっている。償却高は損費となるわけである。

江戸屋で備品を8年間に償却するとすればどうなるか。

買入原價 $\text{¥}960.00$ 、一年の償却高 $\text{¥}120.00$ 、一箇月 $\text{¥}10.00$ となる、これを次のように記入すればよい。

備 品		損 益	
(2) 960.00	(30) 10.00	(30) 10.00	
	次期繰越 950.00		
960.00	960.00		
前期繰越 950.00			

(仕訳) 6/30 損 益 10.00 備 品 10.00

(カ) 資本金勘定

この勘定は、増加すなわち元入と純益とが貸方に記入され、その減少すなわち引出と純損とが借方に記入される。引出というのは出資者が現金や商品を自分の用に使うことである。

(キ) 営業費勘定

営業に必要な経費を営業費といって、次のようなものがふくまれる。

給料・手当・地代・家賃・火災保険料・倉敷料・修繕費・電
 燈料・通信費・旅費・交際費・広告料・販賣運賃・消耗品費・
 税金

これらは、ひとまとめにして営業費勘定で処理してもよいが、
 また重要なものを独立させて、元帳に別々の勘定を設けてもよ
 い。

練習題 14. 次の取引を仕訳してみよう。

1. 青木茂に現金 ￥2,000.00 を貸した。
2. 木村商店へ商品 ￥1,200.00 を販賣して、代金のうち ￥500.00
 は関東銀行あて小切手で受け取り、残りは掛とした。
3. 大山商店から買掛金 ￥1,000.00 を取り立て、当座預金とした。
4. 木村商店から受け取った小切手 ￥500.00 を当座預金とした。
5. 金銭登録器を買い入れ、この代金 ￥6,000.00 を現金で支拂った。
6. 営業用として建物を新築し、この代金 ￥50,000.00 小切手を振
 り出して支拂った。
7. 小池商店へ買掛代金のうち、￥500.00 小切手を振り出して支拂
 った。
8. 店主が ￥100.00 の商品を私用のため持ち出した。
9. 所有公債の利子 ￥185.00 を現金で受け取った。
10. 自動車を修繕し、この費用 ￥400.00 を現金で支拂った。

6. 取 引

1. 取引とはどんなことか

簿記は営業上生ずるいろいろな事がらを記録計算するもので
 あるが、それは営業上生ずるすべての事がらではない。記帳し
 なくてもよいものもある。そこで、記帳すべき事がらと記帳し
 なくてもよい事がらとの区別は、いったいどうしてつけるか、
 これを考えてみよう。

考えてみると、勘定に記入する事がらは、いろいろな勘定科
 目に増減をひき起すことである。いろいろな勘定科目を分類す
 ると、資産・負債・資本・損費・収益となり、さらにこれをま
 とめると資産と資本になる。したがって取引とは、営業の資産
 と資本に増減をひき起す事がらであるということが出来る。

したがって、ふつうにいう取引という言葉の意味とは必ずし
 も同じではない。たとえば、家屋の貸借契約は一般には取引と
 いわれるが、資産・資本になんらの変動もひき起さないから簿
 記では取引と認めない。

これに反し、物品の盗難、家屋の焼失などは、ふつうの意味
 では取引といわないが、資産が減少したのだから簿記では取引
 となる。

2. 取引はどう分類されるか

そこで取引は、資産・負債・資本・損費・収益の増減を含ん
 でいるものであるが、よく観察してみると、その増減の組合せ

には一定の型があることに気がつく。

さて、どんな型があるか。みんなで考えてみよう。

△ここで知っておく必要のあること

取引によって損費または収益が生ずるか生じないかを標準として分類すると、次の三つの型がある。

(ア)

(1)手数料 ¥80.00 を現金で受け取った。

現金(資産)増加——受取手数料(収益)発生

(2)給料 ¥2,000.00 を現金で支拂った。

給料(損費)発生——現金(資産)減少

このような取引を損益取引といっている。

(イ)

(1)現金 ¥5,000.00 を当座預金とした。

当座預金(資産)増加——現金(資産)減少

(2)商品 ¥8,000.00 を仕入れ、代金は小切手を振り出して支拂った。

商品(資産)増加——当座預金(資産)減少

(3)借入金を資本金に繰り入れた。

借入金(他人資本)減少——資本金(自己資本)増加

(4)資本金として現金 ¥10,000.00 を元入した。

現金(資産)増加——資本金(資本)増加

(5)商品 ¥3,000.00 を掛で仕入れた。

商品(資産)増加——買掛金(他人資本)増加

これらの取引は、資産相互間・資本相互間に入れ替りがある。

か、または資産と資本とに同じ変化を生ずるだけで、損益に関係がない。このような取引を交換取引といっている。

(ウ)

(1)原価 ¥800.00 の商品を ¥1,000.00 に販賣し、現金を受け取った。

現金(資産)増加——
商品(資産)減少
商品販賣益(収益)発生

(2)借入金 ¥1,000.00 を利息 ¥65.00 と共に現金で支拂った。

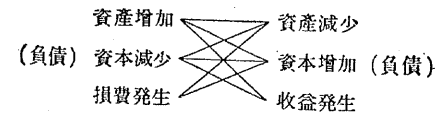
借入金(他人資本)減少
支拂利息(損費)発生
——現金(資産)減少

このように損益取引と交換取引と混合した取引を、混合取引といっている。

このほか、現金の収支をとまなうか否かによって、現金取引と振替取引とに分けることもできる。

3. 取引の対立関係をまとめてみるとどうなるか

上のように資産・負債・資本・損費・収益に属する取引の要素は、いろいろに組み合せて、さまざまな取引となっているが、これをまとめてみると次のようになる。



これによって、取引は資産と資本との対立をもとにし、資本の一部である負債・損費・収益がこれに結びついて、一定の対立

関係を作っていることがわかる。

練習題15. 次の取引はどのような種類の取引か、また、その対立関係はどのようなものか、調べてみよう。

1. 現金 ￥5,000.00 を出資して営業を始めた。
2. 店用器具一式を買い入れ、この代金 ￥650.00 を現金で支拂った。
3. 現金 ￥2,000.00 を借り入れた。
4. 商品 ￥5,000.00 を買い入れ、代金のうち半額は現金で支拂い、残額は掛とした。
5. 商品 ￥3,000.00 を現金で賣り渡した。原価 2,700.00。
6. 商品 ￥2,000.00 を掛で仕入れた。
7. 商品 ￥3,500.00 を賣り渡し、代金のうち ￥1,500.00 は現金で受け取り、残額を掛とした。この原価 ￥3,150.00。
8. 借入金利息 ￥50.00 を現金で支拂った。
9. 賣掛金 ￥2,000.00 を現金で受け取った。
10. 買掛金 ￥4,500.00 を現金で支拂った。
11. 給料 ￥1,500.00 を現金で支拂った。
12. 家賃 ￥100.00 及び雑費 ￥50.00 を現金で支拂った。

7. 決 算

1. 決算はどんな順序で行われるか

勘定記録から損益計算書と貸借対照表とを作ることが簿記のすじ道であるけれども、これに関連して試算表を作ったり、商品のたな卸しをして商品販賣損益を計算したり、建物・備品の減價償却をしたり、元帳を締め切ったり、いろいろな手続が必要となる。今、これらの手続を含めて決算手続を順序だててみればどうなるか。

みんなで考えてみよう。

△決算の順序

手続の関連を考えると、これを順序だててみると、次のようになる。

- (1) 試算表の作成
 - (2) たな卸表の作成
 - (3) 元帳の締め切り及び仕訳帳・補助簿の締め切り
 - (4) 決算諸表の作成
- これらの手続のうち、新しい事項について研究しよう。
- (ア) たな卸表について

商品勘定を混合勘定として用いたときは、期末にその有高を調べてみないと、商品販賣損益が計算できない。また混合勘定として用いなくても、商品は値段が絶えず変動しているし、盗難・紛失などもあるので、決算のときには、その有高を実地に調べる必要がある。それから建物や備品は減價償却をしなければ

ばならないので、減価償却額の計算をする必要がある。このような必要から商品・建物・備品などの実地調査をして、これを表に書き上げる。この表をたな卸表という。その形式は次のようになる。

た な 卸 表			
昭和 年 6 月 30 日			
摘 要		金 額	
商 品			
電 車	30 個 @ ¥ 80.00	2,400.00	
人 形	20 〃 〃 〃 40.00	800.00	3,200.00
備 品			
机・いすその他店用器具	買入原価	960.00	
	当月償却高	10.00	950.00
			4,150.00

(イ) 損益計算書について

損益計算書・貸借対照表・財産目録の三つが決算諸表といわれている。

損益計算書は元帳の損益勘定から作成されるものであるが、商品販賣損益は営業にとっていちばん重要なものであるから、その計算の内容すなわち前期繰越高・当期仕入高・賣上高・たな卸高を、この表に表わすようにすれば、営業の成績を知るのにいっそう都合がよい。この方法によって江戸屋の損益計算書を作成してみると次のようになる。

損 益 計 算 書

自昭和 年 6 月 1 日 至昭和 年 6 月 30 日

損 費	金 額	收 益	金 額
備品減価償却費	10.00	賣 上 高	11,000.00
営業費	1,385.00	賣 上 原 價	
当期純利益	905.00	仕入高 ¥ 12,000.00	
		たな卸高 ¥ 3,200.00	8,800.00
		商品販賣益	2,200.00
		受取手数料	100.00
	2,300.00		2,300.00

(ロ) 貸借対照表について

貸借対照表は元帳の資産・負債及び資本勘定から作成されるものであるが、この表によって営業の現状がはっきりわかるように、その形式について特に注意を拂う必要がある。商店などの場合、資産では現金を最初として、次に現金に変わる早さの強いものからならべてゆき、負債では返済期の早いものからならべてゆくのがふつうである。このような流動性配列法でゆくと、借方は流動性の最も強いものは現金で、それから預金・賣掛金・商品・備品・建物・土地という順序になる。

○固定性配列法というのはどんなものか、考えてみよう。

○貸方の配列について考えてみよう。

元帳の勘定は貸借対照表との関連を考えて、その開設順序をきめるがよい。さらに貸借対照表を作成するもとなる資産・負債・資本勘定と、損益計算書を作成するもとなる損益勘定とを分け、それぞれまとめて元帳に開設しておくがよい。この二つは締め切り方もちがっているの、このようにすると実務

上、都合がよい。

貸借対照表

昭和 年 6 月 30 日

資 産	金 額	負債及び資本	金 額
現 金	7,255.00	小 林 製 作 所	1,000.00
太 田 商 店	500.00	資 本 金	10,905.00
商 品	3,200.00	元 入 高 卒 10,000.00	
備 品	950.00	当期純利益	905.00
	11,905.00		11,905.00

(二) 財産目録について

財産目録は資産と負債の明細書であって、貸借対照表の資産・負債の内容を示すものである。その形式は次のようである。

財 産 目 録

昭和 年 6 月 30 日

摘 要	金 額
資 産 の 部	
現 金 手 も と 有 高	7,255.00
賣 掛 金 太 田 商 店	500.00
商 品 現 在 高	
電 車 30 個 @ 卒 80.00	2,400.00
人 形 20 " " 卒 40.00	800.00
備 品	
机・いすその他店用器具 買入原価	960.00
当月償却高	10.00
資 産 合 計	11,905.00
負 債 の 部	
買 掛 金 小 林 製 作 所	1,000.00
負 債 合 計	1,000.00

練習題16. 次の取引を仕訳し、元帳に転記し、決算を行って損益計算書と貸借対照表を作ってみよう。帳簿は略式でよい。

1. 現金 ￥10,000.00、商品 ￥5,000.00 を元手として営業を始めた。
2. 備品 ￥1,000.00 を現金で買った。
3. 商品 ￥3,000.00 を現金で販賣した。
4. 商品 ￥8,000.00 を現金で仕入れた。
5. 商品 ￥2,500.00 を現金で販賣した。
6. 甲商店へ商品 ￥5,000.00 を掛で販賣した。
7. 営業費 ￥100.00 を現金で支拂った。
8. 雑費 ￥100.00 を現金で支拂った。
9. 決算をする。

商品 たな 卸 高 ￥4,000.00

備品減価償却高 " 100.00

練習題17. 次の勘定とたな卸事項により、決算を行って損益計算書と貸借対照表を作ってみよう。

現 金 1	借 入 金 6
21,800.00	12,400.00
7,000.00	
資 掛 金 2	資 本 金 7
28,740.00	22,550.00
30,000.00	
商 品 3	営 業 費 8
76,325.00	61,405.00
3,500.00	
備 品 4	雑 費 9
9,700.00	775.00
買 掛 金 5	受 取 手 数 料 10
16,200.00	23,200.00
	485.00

た な 卸 事 項

1. 商品期末たな卸高 ￥24,450.00
 2. 備品減価償却高 " 485.00

記 帳 練 習 例 題

第 二 例 題

主 要 簿 仕訳帳・元帳

補 助 簿 現金出納帳・仕入帳・売上帳

勘定科目

- | | | | |
|------------|------|------------|-----|
| 1. 現 金 | 12 行 | 7. 山 田 商 店 | 4 行 |
| 2. 当 座 預 金 | 5 " | 8. 資 本 金 | 4 " |
| 3. 吉 田 商 店 | 3 " | 9. 営 業 費 | 3 " |
| 4. 商 品 | 7 " | 10. 家 賃 | 2 " |
| 5. 備 品 | 4 " | 11. 雑 費 | 2 " |
| 6. 川 本 商 店 | 2 " | 12. 損 益 | 4 " |
- 10 月 1 日 現金 ￥20,000.00 を元手として家具商を始めた。
 2 日 現金 ￥15,000.00 を関東銀行へ当座預金とした。
 3 日 営業用備品一式 ￥2,800.00 を現金で買入れた。
 5 日 山田商店から仕入れ、代金は小切手を振り出して支拂った。
 机 10 個 @ ￥650.00 ￥6,500.00
 い す 20 脚 " ￥250.00 ￥5,000.00
 7 日 川本商店から掛で仕入れた。
 本 箱 10 個 @ ￥400.00 ￥4,000.00
 10 日 通信費・交通費など営業諸費用 ￥280.00 を現金で支拂った。
 12 日 上野商店へ現金で販賣した。
 机 4 個 @ ￥730.00 ￥2,920.00
 13 日 田中商店へ販賣し、代金は小切手で受け取った。

- 机 6 個 @ ￥730.00 ￥4,380.00
 い す 5 脚 " ￥300.00 ￥1,500.00
 14 日 現金 ￥2,000.00 と田中商店から受け取った小切手を当座預金とした。
 16 日 吉田商店へ販賣し、代金の一部 ￥3,000.00 は現金で受け取り、残額を掛とした。
 い す 10 脚 @ ￥290.00 ￥2,900.00
 本 箱 2 個 " ￥470.00 ￥940.00
 18 日 山田商店から掛で仕入れた。
 机 10 個 @ ￥650.00 ￥6,500.00
 この引取費用 ￥200.00 を現金で支拂った。
 20 日 家賃 ￥250.00 を現金で支拂った。
 23 日 店主の家事用として ￥1,000.00 を現金で渡した。
 25 日 高橋商店へ販賣し、代金は小切手で受け取り、直ちに当座預金とした。
 机 3 個 @ ￥750.00 ￥2,250.00
 本 箱 5 " " ￥470.00 ￥2,350.00
 27 日 電燈料 ￥85.00 を現金で支拂った。
 28 日 買掛金を小切手を振り出して支拂った。
 川 本 商 店 ￥4,000.00
 山 田 商 店 " 5,000.00
 30 日 諸雑費 ￥180.00 を現金で支拂った。
 31 日 決算をした。たな卸は次のとおり。
 (商 品)
 机 7 個 @ ￥670.00 ￥4,690.00
 い す 5 脚 " ￥250.00 ￥1,250.00
 本 箱 3 個 " ￥400.00 ￥1,200.00
 (備 品) 本月償却高 ￥30.00

合 計 試 算 表

借 方	元 丁	勘 定 科 目	貸 方
31,800.00	1	現 金	27,625.00
27,480.00	2	当 座	20,500.00
840.00	3	吉 田	
22,200.00	4	商 店	17,240.00
2,800.00	5	備 品	
4,000.00	6	川 本	4,000.00
5,000.00	7	山 田	6,500.00
1,000.00	8	資 本	20,000.00
315.00	9	営 業	
250.00	10	家 賃	
180.00	11	雑 費	
95,865.00			95,865.00

8. 簿記の意義と効用

簿記というものについて、それがどんなことを行うものであるかを、これまで具体的に習ってきた。そこで今までのことをまとめて、簿記とはどういうことかということを一口にいてみれば、それは、資産・負債・資本・損費・収益の増減を記録し計算して、財産状態と営業成績とをあきらかにすることであるといえよ。

一般の家庭でも簿記は必要であるが、特に商店や会社などでは、財産の種類も多く増減もひんばんに行われるから、とうてい記憶だけにたよるわけにはいかない。また後日の証拠にするためにはどうしても帳簿に記録しておかなければならない。

また、記録しておけばそれを調査することによって、過去の業績を反省したり、将来の方針をたてたりするための資料にも役だつ。このために簿記がどうしても必要となるのである。

○簿記の効用は、まだいろいろある。それを考えてみよう。

9. その他の特殊事項

1. 手形取引の記帳

取引には現金取引や掛取引のほかに手形が用いられる場合もある。商品を仕入れてその代金を手形で支拂うこともあり、また商品を販賣してその代金を手形で受け取ることもある。したがって自分の店が手形の振出人となることもあり、名あて人となることもあり、また受取人となることもある。それぞれの立場に立ったとき、これをどう記帳すればよいか。手形には約束手形と爲替手形とあるが、どういうところに着目して勘定を設ければよいか。

みんなで考えてみよう。

△ここで知っておく必要のあること

簿記では約束手形であっても爲替手形であっても、その手形代金を受け取る立場にあるか、あるいは支拂う立場にあるかを考えて、受取手形勘定か支拂手形勘定かを設けて手形取引を処理する。

〔ア〕約束手形取引はどうつけるか

約束手形には手形に直接関係する人が二人ある。一人は振出人で、他の一人は名あて人である。振出人は手形代金の支拂人であり、名あて人はその受取人である。約束手形の受渡しにつれて、受取手形勘定・支拂手形勘定が、どのように発生し消滅するかを考えてみよう。

振出人（甲）の帳簿

(1)振り出したとき

(例) 乙商店から商品 ￥1,000.00 を仕入れ、代金として約束手形を振り出した。

商 品 1,000.00 支 拂 手 形 1,000.00

(2)満期日に手形代金を支拂ったとき

(例) 上記の手形代金を期日に現金で支拂った。

支 拂 手 形 1,000.00 現 金 1,000.00

支 拂 手 形	
(2) 1,000.00	(1) 1,000.00

名あて人 (乙) の帳簿

(1)手形を受け取ったとき

(例) 甲商店へ商品 ￥1,000.00 を販賣し、代金として約束手形を受け取った。

受 取 手 形 1,000.00 商 品 1,000.00

(2)満期日に手形代金を受け取ったとき

(例) 上記手形代金を期日に現金で受け取った。

現 金 1,000.00 受 取 手 形 1,000.00

受 取 手 形	
(1) 1,000.00	(2) 1,000.00

○掛代金の受拂いとして上の約束手形が受け渡されたとすれば、仕訳はどうなるか。

(4) 爲替手形取引はどうつけるか

爲替手形には手形に直接関係する人がふつう三人ある。振出人・名あて人・受取人である。名あて人は引受によって手形代

金の支拂人となるが、振出人は貸金を取りたてて借金を返す人となるので、手形勘定を用いないで処理できる。

振出人 (甲) の帳簿

(1)振り出したとき

(例) 甲商店は乙商店に ￥3,000.00 の資掛金があり、丙商店に ￥2,000.00 の買掛金がある。甲商店は、丙商店受取、乙商店あて ￥2,000.00 の爲替手形を振り出して丙商店に渡した。

乙 商 店		丙 商 店	
3,000.00	(1) 2,000.00	(1) 2,000.00	2,000.00

受取人 (丙) の帳簿

(1)手形を受け取って、名あて人の引受を得たとき

(例) 甲商店から上記手形を受け取り、乙商店の引受を得た。

受 取 手 形 2,000.00 甲 商 店 2,000.00

(2)満期日に手形代金を受け取ったとき

(例) 上記手形代金を期日に現金で受け取った。

現 金		受 取 手 形	
2,000.00	(1) 2,000.00	(1) 2,000.00	(2) 2,000.00

名あて人 (乙) の帳簿

(1)手形を引き受けたとき

(例) 丙商店から上記手形を呈示され、これを引き受けた。

甲 商 店 2,000.00 支 拂 手 形 2,000.00

(2)満期日に手形代金を支拂ったとき

(例) 上記手形代金を期日に支拂った。

支 拂 手 形 2,000.00		現 金 2,000.00	
甲 商 店		支 拂 手 形	
(1)	2,000.00	3,000.00	(2) 2,000.00 (1) 2,000.00

〔注〕勘定記入のうち番号のない金額は、この手形が振り出される前の貸金・借金の記帳を示している。

○甲商店がこの爲替手形を、丙商店から仕入れた商品の代金として振り出したとすれば仕訳はどうなるか。

(例) 裏書・割引はどうつけるか

約束手形にしても爲替手形にしても、手形代金を受け取る立場に立ったときは、これを受取手形勘定の借方に記入する。そしてつうは、満期日に手形代金を受け取ったときこの勘定の貸方に記入してこれを消滅させる。しかし受取手形は期日前に裏書して他人に譲渡することができるし、割引によって現金に換えることもできる。したがって受取手形勘定は満期日前に消滅の記入をすることがある。割引のときは割引当日から満期日までの日数に應ずる利子を割引料として差し引かれるが、これは割引料という損費勘定の借方に記入する。

(例1) 丁商店から商品 ¥1,000.00 を仕入れ、代金として、かねて甲商店から受け取った当店あての約束手形 ¥1,000.00 を裏書して渡した。

商 品 1,000.00 受 取 手 形 1,000.00

(例2) 甲商店振出、乙商店あて、当店受取の爲替手形 ¥2,000.00 を銀行で割引し、割引料 ¥12.00 を差し引かれ、手取金は当座預金とした。

当 座 預 金 1,988.00 受 取 手 形 2,000.00
割 引 料 12.00

練習題18. 次の取引を仕訳してみよう。

- 12月1日 小川商店から商品を仕入れ、この代金 ¥1,500.00 に対し、きたる25日満期の約束手形 #2 を振り出して渡した。
- 8日 大山商店へ商品を販賣し、この代金 ¥1,000.00 に対し、きたる20日満期の、武田商店振出、大山商店あて、約束手形 #25 を裏書き譲り受けた。
- 5日 中原商店から買掛金に対し、きたる15日満期の、野田商店受取、爲替手形 #8 ¥1,300.00 を振りあてられ、引受をした。
- 6日 木村商店へ買掛金支拂いのため、きたる23日満期の、同店受取、掛賣先町田商会あて、爲替手形 #15 ¥1,800.00 を振り出した。
- 7日 鈴木商会から買掛金に対し、同商会あて、櫻井商店振出、來月10日満期の約束手形 #18 ¥3,000.00 を裏書き譲り受けた。
- 9日 櫻井商店振出、鈴木商会裏書の約束手形 #18 を取引銀行で割引し、割引料 ¥19.80 を差し引かれ、手取金は同行へ預け入れた。
- 15日 中原商店振出、野田商店受取、当店引受の爲替手形 #8 満期につき、手形金額を小切手を振り出して支拂った。
- 20日 武田商店振出、大山商店裏書の約束手形 #25 満期につき取立し、小切手で受け取った。
- 25日 小川商店あての約束手形 #2 満期につき取立を受け、小切手を振り出して支拂った。

2. 記帳の能率を上げるにはどうすればよいか

(ア) 轉記の手数を省くにはどうするか

高橋君は次の取引を記帳するにあたって、なるべく手数をかけないようにしたいと思う。

- 1月6日 木村商店へ商品 ¥1,000.00 を現金で販賣した。
 7日 青木商店へ買掛金 ¥800.00 を現金で支拂った。
 10日 金庫を買い入れ、この代金 ¥600.00 を現金で支拂った。
 17日 根岸商店から賣掛金 ¥750.00 を現金で受け取った。
 22日 大塚商店から商品 ¥500.00 を現金で仕入れた。
 26日 福田商店へ買掛金 ¥120.00 を現金で支拂った。
 31日 本月分の諸経費 ¥115.60 を現金で支拂った。
 1月1日における現金繰越高は ¥680.00 であった。

考えてみると、勘定の中にはひんばんに轉記するものと、まれにしか轉記しないものがある。このひんばんに轉記する勘定について、これを取りまとめて轉記することができれば、手数が省けて記帳能率が上がるわけである。

さて、どうすればよいか。高橋君といっしょに考えてみよう。

△合計轉記のこと

現金・商品などはひんばんに轉記を要する勘定である。

轉記の手数を省くには、これらの勘定の借方あるいは貸方へ轉記すべき金額の合計が、仕訳帳で計算できるように帳簿の形式を直せばよい。高橋君は仕訳帳の形式を次のようにして、これに取引を記入し、現金勘定へは、個別轉記をやめて月末合計を轉記することとした。

多けた仕訳帳

現金	諸口	元	摘要	元	諸口	現金
1,000.00		✓	1/6 (現金) (商品) 3 木村商店へ販賣	3	1,000.00	
	800.00	5	7 (買掛金) (現金) ✓ 青木商店へ支拂い			800.00
	600.00	4	10 (備品) (現金) ✓ 金庫に買い入れ			600.00
750.00		✓	17 (現金) (買掛金) 2 根岸商店から受け入れ	2	750.00	
	500.00	3	22 (商品) (現金) ✓ 大塚商店から仕入れ			500.00
	120.00	5	26 (買掛金) (現金) ✓ 福田商店へ支拂い			120.00
	115.60	6	31 (営業費) (現金) ✓ 本月分諸経費支拂い			115.60
1,750.00	2,135.60				1,750.00	2,135.60
	1,750.00	1	現金	1	2,135.60	
	3,885.60				3,885.60	

元 帳

現金	1	買掛金	2
680.00 (3)	2,135.60		
(30) 1,750.00		(17) 750.00	
商品	3	備品	4
500.00 (6)	1,000.00	(10) 600.00	

買 掛 金 5		営 業 費 6	
(7)	800.00	(8)	115.00
(8)	120.00		

このような仕訳帳を多けた仕訳帳といい、現金・商品などについて特別欄が設けられ、金額欄の数によって四けた仕訳帳・六けた仕訳帳と呼ばれる。

(4) 記帳の度数を省くにはどうするか

高橋君は前記の取引の記帳について、転記の度数ばかりでなく、記帳の度数をも省きたいと思う。

考えてみると、取引のうちで重要なものは、補助簿・仕訳帳・元帳と三度記帳される。この手数を省きたいというのがこの問題である。このうちで欠くことのできない帳簿は元帳であって、極端に言えば、元帳だけで他を省いてもよいわけである。

しかし、補助簿は元帳の不足を補い、仕訳帳は元帳記入のまちがいを防ぐなど、それぞれの役目があるので、省いてしまうことは都合が悪い。そこで考えられることは一つの帳簿に二つの役目を兼ねさせることである。

さて、どうすればよいか。

高橋君といっしょに考えてみよう。

△特殊仕訳帳のこと

記帳の度数を省くには、仕訳帳と元帳とを一つにする方法と、仕訳帳と補助簿を一つにする方法とがあるが、ここでは後の場合、ことに現金出納帳を仕訳帳として用いる場合について研究しよう。

現金出納帳に仕訳帳の役目を兼ねさせるには、まず帳簿の形式を直さなければならないが、それは元帳に転記する関係上、勘定科目欄と丁数欄を、補助簿としての現金出納帳に加えればよい。そして入金取引はその借方で処理し、勘定科目欄には入金の相手科目を記入する。出金取引は貸方で処理し、勘定科目欄には出金の相手科目を記入する。

現金出納帳から元帳へ転記するには、借方側の勘定科目欄に記入した各勘定の金額は、元帳のその勘定の貸方へ転記し、貸方側の勘定科目欄に記入した各勘定の金額は、元帳のその勘定の借方へ転記するようにする。現金勘定へは貸借そのまま一週目ごととか十日目ごととかに合計額を転記する。

このような転記法となるわけは、借方側について考えてみると、合計額は入金の合計を表わし、勘定科目は入金の相手科目であるし、貸方側について考えてみると、合計額は出金の合計を表わし、勘定科目は出金の相手科目であるからである。

現金出納帳ばかりでなく、仕入帳・売上帳なども仕訳帳として用いることができる。このような仕訳帳を特殊仕訳帳といい、固有の仕訳帳を普通仕訳帳という。

普通仕訳帳では特殊仕訳帳で処理できない取引だけが扱われることとなる。

前記取引を現金出納帳で仕訳してみよう。

(借方)			現金出納帳			(貸方)		
昭和 年	勘定 科目	摘 要	元 金 額	昭和 年	勘定 科目	摘 要	元 金 額	
1	6 商 品	木村商店へ販賣	1,000.00	1	7 買掛金	青木商店へ支拂	800.00	
17	17 買掛金	根岸商店から受取	750.00	10	10 備 品	金 庫 代	600.00	
				22	22 商 品	大塚商店へ支拂	500.00	
				26	26 買掛金	福田商店へ支拂	120.00	
				31	31 營業費	本月分諸経費	115.60	
			1,750.00				2,135.60	
		前月繰越	680.00			本月残高	294.40	
			2,430.00				2,430.00	

練習題19. 現金出納帳から元帳へ轉記して、多けた仕訳帳のときと比較してみよう。ただし元帳の摘要欄には現金出納帳と記入すること。

練習題20. 次の取引を四けた仕訳帳で仕訳し、元帳に轉記してみよう。

- 2 月 1 日 現金 ¥10,000.00 を元入して営業を始めた。
- 4 日 店用器具一式を買い入れ、現金 ¥2,000.00 を支拂った。
- 5 日 営業費 ¥120.00 を現金で支拂った。
- 6 日 商品 ¥2,800.00 を現金で仕入れた。
- 9 日 山本商店に商品 ¥1,000.00 を掛賣した。
- 15 日 大阪商店から商品 ¥1,200.00 を掛買した。
- 18 日 商品 ¥800.00 を現金で販賣した。
- 20 日 山本商店から買掛金 ¥1,000.00 を現金で受け取った。
- 25 日 給料 ¥150.00 を現金で支拂った。
- 27 日 大阪商店に買掛金 ¥800.00 を現金で支拂った。
- 28 日 営業費 ¥50.00 を現金で支拂った。

練習題21. 次の取引を現金出納帳で仕訳し、元帳に轉記してみよう。

- 2 月 7 日 現金 ¥10,000.00 を元入して、営業を始めた。
- 8 日 帝都銀行と当座取引の契約を結び、現金 ¥2,000.00 を預け入れた。
- 9 日 自転車・机・いすその他店用器具を買い入れ、この代金 ¥2,650.00 を現金で支払った。

10 日 山田商店から商品 ¥1,200.00 を現金で仕入れた。

11 日 諸経費 ¥258.00 を現金で支拂った。

12 日 本日現金売上高 ¥281.50

13 日 尾張屋から商品 ¥1,500.00 を現金で仕入れた。

14 日 肥前屋へ商品 ¥1,350.00 を現金で販賣した。

3. 傳票について

(ア) 取引を他の係へ伝えるにはどうするか

経営の規模が大きくなってくると、事務をいくつかの係に分けて執るようになる。このような場合には、取引を最初に取り扱った係で、これを取引に関係ある係へ伝えなければならない。このとき口頭によることはまちがいを生じやすく、また責任を明らかにすることが困難である。そこで紙片に記入して傳達すればそのような欠点が除かれ、さらにこれを記帳の材料にしたり、また記帳を簡略にしたり、照合の手段にしたりすることができるのでいっそう便利である。このような考えにもとづいて傳票というものが用いられる。その傳票の記入法や利用の方法はどうすればよいだろうか。

(イ) 傳票はどう記入されるか

考えてみると、取引には現金の出入をとまなうものと、これをとまなわないものがある。前のものには入金をとまなうものと、出金をとまなうものがあるから、取引には入金取引と出金取引と、現金の出入をとまなわない振替取引の三種があるといえる。したがってこの三種の取引を処理できる三種の傳票があれば、すべての取引を処理することができるわ

けである。ふつうよく用いられる入金傳票・出金傳票・振替傳票がこれである。

(1)入金傳票 入金取引について用いられるもので、收納傳票ともいわれ、ふつう赤刷りにされる。

入金傳票には、金額と、入金の理由を示す貸方科目と、相手方の姓名とを記入し、摘要欄に簡単な取引の要領を書く。

(例) 2月1日 山田商店から先月分の賣掛代金 ¥725.40 を現金で受け取る。

入金傳票		昭和△年△月/日		賣掛金勘定	
山田商店 殿		丁 数	檢 印		
摘 要	金 額	出 納 帳	(印)		
1月分賣掛金	725.40	12			
		賣掛金元帳			

(2)出金傳票 出金取引について用いられるもので、支拂傳票ともいわれ、ふつう青刷りにされる。

出金傳票には金額と、出金の理由を示す借方科目とを勘定欄に記入する。相手方の姓名やその他の記入は入金傳票の場合と同じである。

(例) 2月5日 林商店へ先月分買掛金 ¥1,200.00 を現金で支拂った。

出金傳票		昭和△年△月△日		買掛金勘定	
林商店 殿		丁 数	檢 印		
摘 要	金 額	買掛金元帳	(印)		
1月分買掛金	1,200.00	23			
		営業費帳			
		出 納 帳			

(3)振替傳票 現金の收支をともしなわれない振替取引、すなわち、仕訳すると、借方にも貸方にも現金勘定のあらわれない取引について用いられるものである。ふつう黒刷りにされる。

(例) 2月10日 富田商店の賣掛金を來月10日満期の約束手形 #6 ¥1,500.00 で受け取る。支拂場所 関東銀行。

振替傳票		昭和△年△月/日		檢 印 (印)	
借 方	丁 数	摘 要	丁 数	貸 方	
1,500.00	4	(受取手形)(賣掛金)	3	1,500.00	
		富田商店より約手			
		#6を受け入る。4日付			
		3月10日満期			
		関東銀行渡し			

振替傳票は、振替取引について、ふつうに仕訳帳に記入すると同じ記入の方法で作られる。

傳票はまずこれから各補助簿へ記帳された上で、最後に主要簿係にまわされ、仕訳帳や元帳への記帳材料にされる。記帳が終わったら散乱・紛失を防ぐため、種類別に一括して保存される。

○江戸屋の例題について、入金・出金及び振替の三種の傳票を作ってみよう。

記帳練習例題

第三例題

主要簿 現金出納帳・普通仕訳帳・総勘定元帳

補助簿 賣掛金元帳・買掛金元帳

勘定科目

1. 現金	4 行	8. 買掛金	7 行
2. 当座預金	5 "	9. 資本金	4 "
3. 受取手形	4 "	10. 運賃	3 "
4. 賣掛金	6 "	11. 家賃	2 "
5. 商品	8 "	12. 給料	2 "
6. 備品	4 "	13. 営業費	2 "
7. 支拂手形	4 "	14. 損益	6 "

賣掛金元帳

1. 水谷商店	6 行	1. 佐川商店	6 行
2. 宮本商店	3 "	2. 木村商店	6 "
3. 鶴田商店	5 "	3. 森商店	5 "

買掛金元帳

3 月 1 日 前期繰越高次のとおり。

現金 ¥485.00 帝都銀行当座預金 ¥13,500.00

賣掛金(水谷商店) ¥3,600.00

商品(紙風船 100 袋 @ ¥19.05) ¥1,905.00

備品(店用器具一式) ¥1,080.00

買掛金(佐川商店) ¥10,500.00

資本金 ¥10,020.00

(注) 総勘定元帳・賣掛金元帳・買掛金元帳に勘定を設け、前記繰越額を記入すること。

2 日 木村商店から次のとおり掛で仕入れた。

紙風船 500 袋 @ ¥19.20 ¥9,600.00

5 日 宮本商店へ次のとおり販賣した。

紙風船 300 袋 @ ¥19.95 ¥5,985.00

代金のうち ¥3,000.00 は、同店振出、本日付、きたる 25 日満期の約束手形 #6 で受け取り、残額は掛とした。

7 日 佐川商店へ買掛金支拂のため、きたる 28 日満期の約束手形 #1 ¥10,500.00 を振り出して交付した。

8 日 森商店から次のとおり掛で仕入れた。

ぬり絵 500 組 @ ¥16.50 ¥8,250.00

10 日 佐川商店から次のとおり仕入れた。

自動車 200 個 @ ¥45.00 ¥9,000.00

代金のうち ¥3,000.00 に対しては宮本商店振出の約束手形 #6 を裏書き譲渡し、残額は掛とした。

13 日 林商店へ次のとおり販賣した。

紙風船 200 袋 @ ¥19.65 ¥3,930.00

代金に対して、本月 10 日付、來月 10 日満期、岡野商店振出、林商店あて、約束手形 #13 を譲り受けた。

15 日 木村商店から次のとおり掛で仕入れた。

千代紙 500 組 @ ¥6.00 ¥3,000.00

17 日 長井商店へ次のとおり現金で販賣した。

ぬり絵 300 組 @ ¥17.10 ¥5,130.00

" 同上発送運賃 ¥126.00 を現金で支拂った。

18 日 森商店へ買掛金のうち ¥4,800.00 を現金で支拂った。

19 日 鶴田商店へ次のとおり掛で販賣した。

自動車 200 個 @ ¥48.00 ¥9,600.00

20 日 賣掛金を次のとおり現金で受け取った。

水谷商店 ¥3,600.00

宮本商店 " 2,085.00

21 日 現金 ¥6,585.00 を当座預金とした。

24 日 水谷商店へ次のとおり掛で販賣した。

紙風船 100 袋 @ ¥20.40 ¥2,040.00

ぬり絵 100 組 " " 17.85 ¥1,785.00

千代紙 300 " " " 7.80 ¥2,340.00

同上配達料 ¥116.40 を現金で支拂った。

25 日 諸経費支拂のため、小切手 ¥600.00 を振り出し、銀行から現金を引き出した。

28 日 鶴田商店から賣掛金のうち ¥7,500.00 を関東銀行あて小切手で受け取り、直ちに当座預金とした。

" 本日満期の約束手形 #1 ¥10,500.00 を小切手を振り出して支拂った。

29 日 本月分の家賃 ¥120.00 を現金で支拂った。

" 本月分の給料 ¥280.00 を現金で支拂った。

30 日 木村商店へ買掛金の内拂として來月 10 日満期の約束手形 #2 ¥9,600.00 を振り出し交付した。支拂場所 帝都銀行。

31 日 本月分の諸経費 ¥312.00 を現金で支拂った。

" 本日決算を行った。たな卸次のとおり。

(商 品)

ぬり絵 100 組 @ ¥16.50 ¥1,650.00

千代紙 200 " " " 6.00 ¥1,200.00

(備 品)

店用器具の減價償却額は ¥10.00 とする。

合 計 試 算 表

借 方	元	勘 定 科 目	貸 方
12,750.00	1	現 金	12,340.00
27,585.00	2	当 座 預 金	11,100.00
6,930.00	3	受 取 手 形	3,000.00
22,350.00	4	賣 掛 金	14,085.00
31,755.00	5	商 品	30,810.00
1,080.00	6	備 品	
10,500.00	7	支 拂 手 形	20,100.00
24,900.00	8	買 掛 金	37,350.00
	9	資 本	10,020.00
242.40	10	運 賃	
120.00	11	家 賃	
280.00	12	給 料	
312.60	13	営 業 費	
138,805.00			138,805.00

K260.64~32.1

中 商 903

中学校職業科用

中 学 簿 記

昭和24年3月2日発行 同日翻刻発行
昭和31年1月20日 印 刷
昭和31年1月25日 発 行
〔昭和31年1月25日 文部省検査済〕

著 兼 文 部 省
行 者
翻 刻
行 者 実 教 出 版 株 式 会 社
代 表 者 花 岡 芳 夫
印 刷 者 東 京 都 新 宿 区 市 々 谷 路 久 町 108 番 地
株 式 会 社 亨 有 堂 印 刷 所
代 表 者 大 柴 亨 介

発 行 所 実 教 出 版 株 式 会 社
東 京 都 千 代 田 区 五 番 町 5 番 地
電 話 九 段 (33) 8 2 6 1 - 5 番
電 報 東 京 1 8 3 2 6 0 番

¥ 35.

1956.12 編入

